



幻想恋詩人

Side Storys Vol.1

Elthane SAGA of CHITALKIA



群れ瞬く 星の下にて 君を想う

O.D 214 - Lastleias
Kei - Elthane

エルシアンがラストレアの学院へ通っていた頃のケイとの友情物語。本編が始まる直前の時期です。この夏の休暇が終わってすぐにアスファーンの視察があり、そこから本編はスタートしますが、その前の二人の間に何もないことを美しく思い出すケイの回想。自由の翼 → これ → 本編 の順です。

取り囲まれているような星空であった。夏の夜は蒼く、闇の色も冬より遥かに柔らかい。ケイがそう感じるのは自分の故郷が雪の深い地方であるからかもしれない。例えば、隣で同じようにぼんやり天空を見上げている友人であるなら、また違おうだろうか。見つめた横顔に視線を感じたのか、エルシアンがケイにゆるく笑って首をかしげた。

「何だよ、ケイ」

言われてケイは苦笑になった。ただ何となくと言いくくて星が、と呟くとエルシアンは再び天を見上げてああ、という仄かな返答をした。

「都市だと地上の明かりがあるからな……田舎だとよく見える。気持ち悪いくらいあるな、ほんとに」

そう、とケイは頷いた。エルシアンはラストレアに来るまではずっと王都ザクリアにいたと聞いているし、ラストレアも地方都市としては小さな方ではない。北の脅威ジェア王国に備えた城壁都市だが、その内側はシタルキア第三の都市として、人口と規模を誇っている。多分、彼はこんな小さな村に来るのは初めてなのだろう。明かりの少ない、何も無いような集落に。二人が酌み交わしているのはケイの部屋の窓から出る二階の屋根部分だが、そこから見下ろす明かりはまばらで、はぐれた蛍のようなあやふやさだった。

「田舎だからなあ、ここ。何もなくて驚いたろ。お前、見世物みたいになってるし」

ケイの帰省にエルシアンがついてきた形だが、ともかくも冬に出会ったばかりの友人は今ケイの実家でのおんぴりと夏の休暇を楽しんでいる。家の仕事も棚の整理や掃除程度のことはよく手伝うし、そもそも人当たりが良いから商売に向くようだ。ケイの家は国から許可を受けて塩を扱う商家だが、父親が彼を気に入って店番がてら側に置きたがる。しかもケイにとって面白くないことにケイの連れて来た友人ということで様子を見にきた故郷の幼馴染達が、何時の間にかエルシアンと親しくなっていくのだった、特に女。

それを母親に愚痴ると、母親でさえあら、と声を上げて笑ったものだ。

「だってお前、学院生っていう条件が同じなら格好いい人のほうがいいに皆決まってるじゃないの、馬鹿ねえ」

エルシアンは飛びぬけて目立つ美形ではないが、洗練されて垢抜けた雰囲気と明るく開放的な気性のせいで何処へ行ってもこうなのだ。それに短く切りそろえられた髪型が珍しくて一見で目立つということもあるだろう。男女共に髪は長いのが善良な風俗というものだ。まあね、とエルシアンは明るく笑って酒瓶の首を掴んだ。飲む比率はケイが1ならエルシアンが10だ。彼につき合っていたらケイはあっという間に潰されてしまう。

「でも、いい感じの村じゃないか。お前がよければ来年も来たいよ」

「それは構わないよ。母さんなんかエルスみたいなお兄さんがお前にいれば良かったかしらとか言ってたもんね……」

ちなみにケイの方が年齢は一つ上である。母の言葉は正確にはこう続く。——お兄さんがお前にいれば良かったかしら。お前は本当に馬鹿だからねえ。

ケイは千人に一人程度の合格者しか出ない学院の入学試験を実質首席で通過し、苦手だった運動科目がやっと必須科目から消えた後は全く危なげなく首席を守り通している。一度もそこから落ちたことはない……のだ、が。エルシアンは軽く声を上げて笑っている。

「ああ、確かにお前って馬鹿かも……」

ケイはわざとらしく唇をゆがめ、それから自分も苦笑になった。成績が良いのと要領が良いのは全く違う話なのだった。同じ学院の寮生であるイ・ハイフォンなどは「お前たち足して二で割ったら出世頭かもな」と言う。エルシアンも成績は悪くはない。法律学に関しては時折はっとするような解釈の鋭さを見せることもある。だがエルシアンの特色は成績が云々ではなくて人好きのする性質、誰からも素直に愛されてすんなりと人の和の中心に入り行く明るい気性だ。要領の良さも手伝って、きっとエルシアンは勤め始めれば自分などよりも早く階段を上っていきだろう。他人の輪の中にあって自分であることを崩さずに誰からも一目置かれて中心にいるということを、これほど容易く自然にこなすことができる人間を、ケイは他に知らない。

「多分、学者に向いてんだよ」

エルシアンが慰めなのかそんな言葉を口にしてケイの空になっていたグラスに酒を注いだ。そうかも、とケイは答えて軽くグラスを掲げ、僅かに酒を舐めた。エルシアンにまともにつき合っていたらあしたはきっと一日苦しむに決まっている。

「卒業したら研究院に残ろうかな……」

ケイは呟く。学者として学問を研鑽するための機関が研究院と呼ばれているが、実質学者に弟子入りするのと同じだ。人に教えるのが嫌いではない。

「そうしたらいいよ。お前、絶対向いてるよ。多分ねえ、どっかに就職したらあっという間に便利屋になって朝から晩までこき使われそうだし」

ひどい言われようだと思う反面その通りになるだろうという予感もある。それに配慮してくれる良い主人に巡り会わなければ過労死するかもしれない。

「エルスはどうすんだよ、卒業したら。王都へ帰るのか？」

順当に行けば後一年半ほどで二人とも卒業することになりそうだった。お互いに落第を喫するような成績ではない。エルシアンの返答は、一瞬遅れた。

「……俺は……そうだな、研究院に残るか……」

それは意外な言葉であった。残るとするなら法律学を修めるだろうが、彼がそれほど学問に情熱を傾けようと思っていないのは明らかに思われたのだ。ケイが不思議そうな顔をしているのに気付いたのかエルシアンは頬で軽く笑って酒を含んだが、その視線はどこか遠い。星を透過して更にどこにもない場所を見ているようだった。王都に帰らないのだろうかとかケイは思い、それから彼の身の事情について実は何も知らないことに気付いた。今までまるで考えたこともなかったが、エルシアンの口から親兄弟の話を聞いたことがない。天涯孤独と言うには彼には金銭の余裕があった。時折ぎょっとするほどの大金を持っていることがある。

「王都には帰らないのか」

ケイは言った。エルシアンは僅かに迷うような時間をおいてから曖昧に頷いた。

「あっちへ行っても特に何かがあるわけじゃないからな。……別に、どこに行っただって同じだし……」

最後の言葉が何を意味するか分からなくてケイは首をかしげる。将来の軌跡が既に見えているような言葉だが、研究院に残るということは学者になるということで、それはラストレアに定住するということと同じことだ。

けれどそれにはきっとエルシアンの語らない家庭の事情が深く絡んでいるのだという思いがそれ以上を聞くのを止めさせた。話したくないのか、話せるものではないのか。どちらでも同じだ。自分たちが今並んで群れ瞬く星の下にいることに、一片の関連もない。関係ないとまっすぐに言えることが、自分にも彼にも大切なことだという確信だけで良かった。

エルシアンが不意に酒を飲み干した。酒精の香りがふわりと空中を一瞬舞った。

「俺の家族のこと聞きたいんだろう？ そんな顔してる、ケイ」

僅かに残るからかうような語調にケイは苦笑して話したくないならいいよ、と言った。無理に聞くことでも、知らなければならぬことでもなかったからだ。エルシアンは小さく笑った。嬉しそうな顔をするとかケイは思った。

「いいよ、ケイ。俺は……お前になら話してもいいような気もするんだ——誰にも、絶対、言わない？」

何だよ、とケイはエルシアンの肩を小突く。

「勿体ぶってさ。重大な秘密？」

「そう、重大な秘密……」

エルシアンは笑いながらケイの目を覗き込んできた。そこにあったのが意外に真剣な光であったのに気付いてケイは背筋を伸ばし、厳粛めいて頷いた。エルシアンはゆるく首を俯けながら何かを考えていたが、やがて顔を上げた。

「家族か……」

呟きに籠った万感に、ケイはやはり聞いてはならないことなのだろうかという、一種の罪悪感を覚える。遮ろうかと迷っていると、こつんと額を弾かれた。エルシアンは笑っていた。その笑顔の安息にケイはようやく救われるような

気持ちになることができた。エルシアンは暫く黙って何か考えていたが、やがて困ったように笑ってケイを見た。

「何から話していいのかわからないや……」

ふうん、とケイは頷く。けれど「秘密」にしておくなら何を聞いても今は許されるのだという了解を既に得ているから、自分から聞いてやるのが多分エルシアンには楽なことだろうと結論をつけた。確かに自分から話す取りかかりの部分が自分で見つけられないことはあるだろうから。

「じゃあ……家族構成から」

何だか見合いの釣り書きを書いているようだと言ったケイは思った。エルシアンも同じことを思ったようで小さく声を上げて見合いじゃないんだからさ、と笑っている。それがひとしきり落ち着いた頃、エルシアンは眉を寄せて宙を睨んだ。

「えーと……兄が１２人、姉が９人、弟が１８人で妹が１４人……だったかな。父親はとりあえず元気」

「……は？」

言っていることがわからない。いや、分かりはするのだが理解ができない。

「何、それ」

「だって事実だから仕方ないじゃないか」

エルシアンはふて腐れたような表情になった。ケイは首をかしげる。それから母親について彼が触れなかったことに気付いてお母さんは、と聞いた。エルシアンが肩をすくめた。

「人だから必ずいるんだろうけど、誰だかわからないから。俺、母親知らないんだよ」

悪いことを聞いてしまったとケイは思わず口を押さえるが、エルシアンの方は案外平坦な表情だった。

「いいって、そんな顔しなくても。物心ついた時からいないのが当たり前だったから、心の傷だとか言い張る気もないし……気にするなって。母親に実際、会いたいかどうかとも良くわからないんだ」

だがその横顔は十分に寂しそうだとケイは思う。夏の休暇中王都にも帰る素振りがなく、どこかへ行くような気配もなかったから良ければとケイは帰省に誘った。どこにも帰る巣がないというのならそれは確かに辛いことに思われたからだ。家族のことは気にならないでもなかったが、エルシアンが帰らないと決めているなら無理に聞き出すことだとも思えなかったから聞かなかった。いいんだ、とエルシアンが言った。

「育ててくれた人がいるからいいんだ。本当にそれはいいんだよ。なあ、ケイ。育ててくれた人が昔、俺に言ったことはさ、人が生まれたときのことを覚えていないのはそれが大して重要ではないからだ、ってことなんだよ。それに、父上は一応俺が息子だってことを認めてるんだから問題ないさ」

父上という呼び方がすると彼の口から出てきたことでケイはある程度の納得をする。元々エルシアンの仕種や雰囲気から貴族なのだろうとは思っていた。それが王都から離れた北の城塞で寮暮らしであるから家庭の事情という奴なのだろう、総括するなら。

ああ、とケイは不意に自分の中での順位の整理を終えた。なるほど、こう聞けばいいのだ。

「お父さんって何してる人？」

家名などは伏せておくつもりがあればそうすればいいし、話してくれる気があるならエルシアンが判断すればいい。多分、ここからが一番分かりやすいだろう。エルシアンは短く口笛を吹いた。

「いい質問だな、ケイ。それはかなり当たりだぞ」

「だってさ、お母さんがわからないのにお前って結構いい暮らししてそうだよ。それに……その兄弟の数が本当だったらちょっとすごい」

それだけ子福であるのも中々聞かないが、養っていけるだけの財力も相当のものだ。それに、まさか全員が一人の腹から生まれていることはないだろう。ざっと考えても十人以上の妾がいるということになる。まあね、とエルシアンは頷いて言った。

「父上は、一応国王やってる」

「……こく、お……」

復讐しかけてケイは言葉を止めた。

沈黙。そして。

「ここここ国王お——いてえ！」

思い切り舌を噛んだ絶叫を、エルシアンの手が素早く塞いだ。ケイはごくりと息をのんだ。エルシアンがケイの唇から手を放し、静かにというように手振りをした。ケイはこくんと反射で頷き、それから深く呼吸をした。肺に呼気が満たされて鋭く痛むほどに、心臓が大きく速く鳴っているのが分かった。

「じゃあ、それってことは、つまり……」

「父が国王なら俺は王子だな。父上にとっては十三人目の息子だよ」

第十三王子。ケイは生唾を飲み込んだ。何を言っているのかわからなかった。

「……な一んてな。お前さあ、そういう冗談、実は好きだろ？ 不敬罪って知ってる？」

ケイはごくりと飲んだ生唾が落ちすぎるのを待ってエルシアンを肩を小突いた。ははは、と笑う声がまだ動揺の余韻を引きずっている。そもそも、王族が侍従も連れずに学生寮になどいるものか。簡素という美德の号令の元、実情は寮の予算の関係上ぎりぎり削られている経費のせいで寮の暮らしは王族のそれと比べるのが馬鹿馬鹿しいほど繁雑なことが多い。例えば廊下磨き、ランプの掃除、食事の当番。エルシアンはどれにも文句を言わず、手際も悪くなかった。この点ケイのほうが不器用なほどだ。

脅かすなよ、とケイはエルシアンに向かって笑って見せる。かなりぎこちなかったはずの表情は、声をあげて笑ったことでやっとまともに動くようになった。エルシアンは苦笑して自分の手の杯に口をつけて飲み上げた。

「冗談かあ……」

「そう。お前、貴族なんだろう？ 俺にもそれくらいなら分かるさ」

ふとした手付きや仕種の優雅さは時折彼の出自の良さを教えてくれた。貴族は総じて気位が高くケイ達平民をはなから馬鹿にしているものも多い。それを成績という目に見えるもので完膚無きまでに叩きのめしていることで、ケイに対する学院にいる貴族達の態度は尚更冷たい。

——ケイにも分かっている。所詮どれだけ栄達を重ねても最終的にたどり着くのは彼らの補佐官であろうことも。けれど、努力すること自体が無駄だと思ったことはない。それが自分に掲げる胸の中の星、極点を示す方角星なのだった。

だからエルシアンの気安さと馴染みやすさは密かに嬉しく、心休まる事実であったのは確かだ。彼が殊更自分の出身を口にしないのも家門に迷惑をかけないためだと思っていたし、更に言うならその感覚の水平さからして貴族の中でも下等の家の長男でない、はじかれ者の訳ありの次男とか三男——これがケイの考えついたエルシアンの正体だった。そんなことを言うと、エルシアンは訳あり、と軽い笑い声を立てた。

「いいところへ来てるんだけどな、ケイ。人の言うことをちゃんと信じないといい大人になれないぞ」

「信じるも何も」

ケイは苦笑を返しながらやっと空になった自分のグラスに酒とその三倍の量のあて水を注いだ。エルシアンがにやにや笑いながら信じられないことするなお前、と呟く。ケイはそれを無視すると、肩をすくめてエルシアンを見た。

「いきなり王子ですって言われてそうですかって言うの、ないと思うけど？ 証拠でもあるなら別だけどさ……」

証拠ね、とエルシアンは繰り返して、懐から指輪を出してケイに渡した。星明かりの下でも、そこに彫られた文様はくっきりと陰影になって見えた。双頭の不死鳥が太陽に爪をかけている。広げた翼の数は四対。一頭は上を、もう一頭は下を向く意味は天地全てを照覧するものであるということを示す。

ぼんやりした衝撃はやがてははっきりした震えになってケイの体に広がっていった。この文様は見たことがある。見たことがない人間などこの国にいるものか。王立学院の正門で、ラストレア上に掲げられた国旗で、隊列を成して行く近衛騎士達の乳白色のマントの背で。国の施設の一番良い場所に必ず掲げられているこの紋章。

「う……そ、だろ、ほんとに……？」

国王の肖像画は普段は庶民には禁じられているが、生誕祭のときには公開される。威厳と力に溢れる眼差しをした青年の姿は即位したときのものだから、エルシアンよりもやや年齢が上の頃ということになる。面影を追いたいと思うなら無理ではない、くらいには似ている……気がする。自分の表情からエルシアンは今ケイが何を考えているのかを察したのだろう。ラストレアの肖像画はあんまり似てない、と笑った。

「だ、だって、なんで寮とかにいて、どうして学院に……いや、その前にラストレア……？」

「だーからあ、はじかれ者の訳ありの十三男だってさ。どうしても信じられないなら従者扱いってことでラストレア城を見物に行くか？ サラーラ叔父に紹介してやるぞ」

サラーラとは学院の所在地であるラストレア城塞都市を治める大公の名だ。エルシアンの話が本当だとするのなら、このサラーラ大公は現国王の実弟だからエルシアンには叔父にあたる。ケイは反射的に首を振った。そんなことを考えるだけ

でも不敬のような気がしてたまらない。そしてケイは恐ろしい事実につき当たって思わず立ち上がり、眩暈を感じて座り込み、落ち着かずに立った後、慌てて膝をついて平伏した。王族に対する礼儀の詳しいことは知らないが、許しを得ずに直接顔を見るなということだけは知っている。

ちょっと待て。

伏した背中を冷汗が過ぎていく。混乱は極まっていて系統として物を考えることなど出来ないが、今までの言葉も態度も到底許されるものではない。王族は人にして人に非ずとさえ言われる超越した存在だ。口を聞くことさえ僥倖なのに……いや。

ちょっと……待て。

日常の友人同士の気楽さに結構小突いたりどやしたり、軽口として馬鹿だの何だのって罵倒したような。　ちょ、っと、……待て。

大体、先月の末につき合っていた女がらみで散々喧嘩した挙句、俺……こいつ殴った、よ、うな……

眩暈で倒れそうなケイの耳がぎゅうっとつまみ上げられたのはその時だった。いつもの癖で痛え、と声を上げかけて、ケイはそれを半端に飲み込んだ。今更という気もするし、今からでもという気もする。

「いいよ、ケイ。俺はそれ、皆には黙っておいて欲しいんだし。そんなことするなよ。友達にそんなことされて嬉しいかよ……顔上げろって」

恐る恐る上げた視線の先で、エルシアンが仕方なさそうに笑いながらグラスを掲げたのが見えた。硝子に刻まれた模様で月光がきらり反射した。

「いいから、普通にそこ座れよ。なあ、俺は今まで通り普通にやりたいんだよ」

「そんなこと言わ……仰られても」

この困惑をどう処理していいのか分からない。ケイがぐずぐずとそんなことを呟いていると、エルシアンは呆れた、というように大きく肩をすくめて溜息をついた。その余韻の長さにケイは顔を上げて目の前の、初めて見る王族を眺めた。

「お前がそんなだったら他の奴らにも知れるじゃないか。よせよ、それも嫌で寮にいるんだからさ」

ケイは言葉を何と返してよいかも分からずに俯いた。どういう言葉で、どういう風に返そうか。そんなことを逡巡するうちに、ケイはふと沸き上がってきた溜息に身を任せた。とても悲しくなってきたのだった。エルシアンがケイの背中を軽く叩いた。それは今までと同じくケイを緩やかに励ます仕種だった。

「いいよ、今まで通りに普通で。もし将来何かを言われることがあったなら、俺が許したと言えればいい。念書を書けというなら書いてやるけど……なあケイ、本当にそんなもの、必要なのか……」

最後のほうは天空に紛れるように小さな声だった。ケイは頷くことも出来ない。エルシアンは微かに笑って膝を抱え直した。小さくまとまった姿勢を見ていると、彼が身分相応という規格の中にはきちんと収まりたがっていないのが分かった。

いいんだ、とエルシアンが繰り返した。ケイは膝に頭を乗せてこちらを見ている彼の口許に浮いている、穏やかな笑みを見た。少しづつ、何かが抜けていくように動悸が収まっていくのが分かった。流星が目端をかすめた。ケイはそれを見上げて、星、と言った。エルシアンが吐息だけで返事をしてケイの視線を追うように屑星たちを眺め上げた。

「……王都ではこんなのはないよ。綺麗だな」

「そう、かもしれな……いです、え、と……」

語尾を迷っていると、こつんと額を弾かれた。ケイは彼の視線を受け止め切れずに背筋を伸ばして座り込んだ。

「なあ、ケイ。俺の父が国王だったってことは、俺が選んだんじゃない。生まれついてのものっていうのがあるだろう？　足が速いと偉くて手先が器用だと偉いのか？　それは偉いことなのか、すごいことなんだろうか？」

エルシアンの言葉に籠った意味を汲み取れないほどケイも子供ではない。単純に、明快に、別の話に例えてするなら分かるのだ。けれど今ケイを支配している逡巡は理屈ではなくて反射なのだった。

ケイが黙っていると、エルシアンは少し悲しそうな顔をした。軽く頬を触られてケイは隣の王子を見つめる。エルシ

アンは苦笑のような哀しみのような微妙な表情のまま、ケイの首に手を回してゆったり抱きついた。

「……俺は、今、自分がこうやって他人に触れるということが、嬉しい……」

何の事か分からない。それはきっとケイの知らない王都でのエルシアンに関わることなのだろう。潔癖症だと思ったことはなかったから、何かあったのだろうか。けれどエルシアンが今、と付け加えたことでそれが既に過去の遺産となっているのも分かった。

エルシアンはその話をそれきり続けなかった。多分、聞いて欲しくないことなのだろう。だが、それを口にしたとき彼が微かに震えた気がした。それは夏の夜冷えの累積だったかもしれないが、ケイは何故だかとても切なくて、体重を半分かけたエルシアンの肩を抱き返した。エルシアンが吐息で笑った。

「いいんだ、ケイ——、お前と会えて、本当に、良かった……」

「エルス……」

不意に何のつまづきもなく、言葉が出た。それにすぐに気付いたのだろう、エルシアンがケイの肩を叩いて破顔した。笑顔は伝染する。その心が伝わっていく限り、手をつないだ箇所から幸福が伝わるようにずっと繋がって行ける。その自信に根拠はないが、それでも事実だろうから。ほんのさっき、自分が懸命に刷り込もうとしていた言葉をもう一度、自分に刻もう。

——自分たちが今並んで群れ瞬く星の下にいることに、一片の関連もない。関係ないとまっすぐに言えることが、自分にも彼にも大切なことだという確信だけで良かった。誰のためでもなく、自分のために。

エルシアンの肩を抱きながら見上げる星空は、やはり満天の瞬き。いつかこの星の下にいたことを思い出すだろうかとケイは思った。エルシアンと出会ったことを幸福のうちに総括する瞬間、この星を思い出したいと強く思った。

黙って飲み明かす夜は、静かだった。月明かりが降り注いでいる平穏な夜を、これから自分が幾つ持てるのだろうかと思うと、ケイはゆるやかに笑みになる。彼の隠していた事実も、全部を受け入れていこうと覚悟が定まると後は呆気ないほど簡単に自分の心は屈伏した。エルシアンはケイにしがみついていた体を既に放し、いつもの早さであっという間に酒の瓶の水平線を下げていく。王宮の話はケイは聞きたかったが、エルシアンはあまり乗り気せずに生返事ばかりだったから諦めてしまった。そのうち、また聞く機会もあるだろうから。

その代わり、ケイは学院生活の話をした。共通の友人、共通の授業、そんな他愛ない話ばかりでも確かに自分たちの間には繋がるものがあると信じられた。学院に入学したばかりの頃は乗馬と弓射の時間が苦痛であったという、エルシアンは軽やかな声を立てて笑った。弓の的中と点数の最高点を教えてやると、呼吸ができないほど笑っている。むくれてお前は、と聞くとケイの点のおおよそ三倍だと言った。それは一瞬怒りを忘れて感心するほどの点数だった。

「すごい……じゃんか」

ケイの驚いたような賛辞にエルシアンは苦笑した。

「近衛に散々鍛えられたからさ、自分の足場がしっかりしてれば何とかね。騎乗してるともう駄目。狩猟会なんか、獲物をとったこともないものな」

「ふうーん」

元の身分を告白したことで、エルシアンの口調はかなり無理をしない自然なものへなった。今までもぎこちないと思ったことはないが、彼が慎重に自分の出身に関わることを避けてきたのが分かった。ケイの前で、繕う必要がなくなったのだ。そう思うと、ケイはふと自分が例えようもなく嬉しそうに笑っていたのに気付いた。何だよ、とエルシアンが仕方なさそうに笑うが、彼の顔に浮いているのも自然な暖かみであって、他のものではなかった。うるさいなとケイは彼の肩を若干荒く叩く。同じようなことをエルシアンがする。そうやってじゃれあっていると、部屋に戻るための窓が開いてケイの母親が姿を見せた。

「適当に寝なさいよ、ケイ。夏でも夜は冷えるから、ちゃんと毛布を……」

子供がケイ一人のせいか、特に母親はケイを溺愛と言っていほど可愛がっている。世話を焼くのが生き甲斐な部分があって、帰省すると大概周囲をぐるぐる回って学院の話から寮生活の話、新しい彼女ができたかどうか、までを根掘葉掘聞くのだった。

「分かったよ、うるさいなあ」

ケイはいささかうんざりしながら適当にあしらう。決して嫌いだとは思わないが、やはり多少の反抗心は彼にもあるのだった。母親はまあ、と声を上げた。

「親に向かってうるさいって何ですか、本当に」

延々と説教に転じそうで、ケイは分かったよ、と大きな声を出した。母親は更に不機嫌にまあ、と繰り返した。エルシアンが苦笑しながらケイの肩を小突いた。さっさと謝れと言われてるのが分かって、ケイは溜息になる。結局親と自分を繋ぐものは切れないのだ。

「ごめんって。適当に切り上げるから、母さんももう休んでよ」

明日は仕入れでしょう、とケイはそちらへ意識を誘導する。仕入れの日は父親が朝早く家を出るために、母親もまた起床が早かった。適当に母親を追い払ってケイはふう、という溜息をついた。

「ごめんな、うるさくって……」

ケイは照れ臭いのもあいまって、尚更顔をしかめて見せた。エルシアンは曖昧に笑った。

「いいじゃないか。俺、お前の家族って本当に家族なんだなって思うよ……」

意味することがよく分からなくてケイは首をかしげる。暫くの沈黙を経て、やっとその内容が分かった。ケイは俯いた。神経の無いことを言ったような気がしてならなかった。エルシアンの母親は行方が知れず、そして父親は——父親が誰であるのかをケイはとりあえず無視することにした——エルシアンを認知したまま放任したのだ。それを今、彼の口

から聞いたばかりだった。はじかれもの、と彼が自分で言ったその自嘲を、幽かに残る曖昧な痛みを、まるで分からないというってしまうほどケイは嘘が巧くなかった。

ケイが黙っていることで、エルシアンはケイが何を思っているのかを知ったようだった。よせよ、と苦く、そして甘く笑った。彼の中では既に整理はついているのだろう。欲することも望むことも既にしなくなったことだけが事実で、それをケイは酷く悲しいことだと思った。

「いいんだ、父上のことは……俺はあの人にとって多分、要らない子供なんだよ。でもさ、それでも今まで、ずっと王宮で暮らせてくれたし、学校も行かせてくれたし……」

エルシアンの声は次第に低く、呟くようになっていった。彼が必死で父親が自分を気に掛けてくれた証拠を探しているのをケイは分かった。ケイは隣で膝を抱えるようにうずくまったエルシアンの肩を抱いた。触れ合うのが怖かったとエルシアンは言った。その怖さが何故かは知らないが、それでも体温を透かして自分が彼を本当に想い、想い続けるだろうということを教えてやりたかった。

「要らない子供なんていない」

ケイは幽かに震えているエルシアンの体を支えるように、強くしっかりした声を出した。

「陛下はきっと、お前が好きだよ。とても好きだよ。だからお前の望みを聞いてくれたじゃないか。認知だってしてくれたじゃないか。お前をとっても好きで、好きだから……だから、厳しいんだよ」

「うん……そう、かな……」

エルシアンの返答はケイの言葉を信じた確信ではなかった。迷っているのが分かった。彼もまた、ケイの言葉を闇雲に信じたいのだ。けれど過去の蓄積が素直に頷かせないほどに彼の心を固めている。ケイはエルシアンの肩を揺すった。「そうだよ。俺が保証するよ。なあ、お前を嫌いな奴なんかいないよ。そんな奴いる訳ないよ。お前はいつでもそういう奴だよ。そこにいだけで、誰でもみんなお前が好きだよ……」

エルシアンは泣きそうな顔で笑い、それから顔を隠すように片手で額を押さえた。ゆっくりその体がケイにもたれかかってくるのを、ケイは抱きとめてやる。エルシアンの体はほんの僅かに震えているようだった。何かを耐えるように。

「ごめん、……——」

エルシアンが呟いた。

「俺、今、ちょっと酔ってるかも……」

「うん……」

ケイは自分の声もまた、エルシアンの波長と同じように震えているのに気付いた。それを彼に気付かれないように、ケイは星を見上げた。星の空は蒼く、柔らかな闇だった。ゆったりと自分の肩で呼吸するエルシアンの体は温かく、その体に血潮の波があることをケイは今、ひどく愛しく思った。

「いいんだ」

ケイは落ち着かせるように彼の背中を撫でてやりながら呟いた。

「いいんだ、エルス。酔ったときくらい、愚痴くらい、言えよ……」

伏せた顔の下でエルシアンが呼吸だけで笑った気配がした。ケイがそれを受け止めてやりながら再び空を見上げたとき、視界の中で流星が逝くのが見えた。それを教えてやろうと、ケイはエルシアンの背を軽く叩いた。

……夏の夜空に、星は少なかった。地上の明かりがあれば天空の光は弱く、屑星の名の下に淘汰されて闇へ紛れてしまふ。ケイはそれを見上げながらゆっくりと溜息をついた。いつだか、こんな星を彼と眺めたことがあった。あれはもう、……二年以上前のことだろうか。尾をひいた流星の瞬きが一瞬、ほんの僅かな内に過去へと連れていってくれた。ケイは目を細める。

今更これを思い出してどうしようというのだろう。追憶は暖かではあったが、それを受け取るときにそれが持つ温みで火傷をしそうなほどに痛かった。

エルシアン。お前、どうして俺を……切り捨てようとするんだ。

彼からの栄達など欲しくない。王都に来て、王太子の秘書として働き始めて分かる。エルシアンに確かに出世の道はなく、父王には無視されており、権勢や栄光から全く遠いところにいるのだということが。エルシアンからもたらされるものは驚くほど少ないだろう。それに、ケイの主人である王太子がケイを買ってくれており、恐らくは地方の領主か名誉職程度の官職を歴任して生涯を終えるだろうエルシアンよりも、ケイのほうが深く国政に関わることができる。だから、身分など関係ないとお前が言ってくれたことが尚更、今、嬉しいはずなのに。

深く溜息をついたとき、背後からケイを呼ぶ声がした。ケイは振り返り、軽く手を挙げて見せた。

「ごめんね、本当にごめん。許されて？」

見上げてくる視線にケイはゆるく笑う。多少待ったのは事実だったが、ぼんやりしていた時間もまた、貴重であった。……彼のことを、思い出していたから。

「いいんだ、コーニー。少し、考え事してたから」

恋人の額に軽くキスをして、ケイは笑ってみせた。そう、とコーネリアは不思議に笑ってどうしたの、とケイの頬をつまんだ。柔らかな痛みにケイはぬるくやるせない気持ちになった。愛しい女がいて、仕事は充実している。給料もいいし、同僚ともうまくやっている。何が不満なんだ、俺は。

その答えはもう分かっている。エルシアンが何故か自分を弾き、自分には会いたくないと言い、自傷を繰り返しながらのたうっているのを、今、傍観しているからだ。手を差し伸べようとするのを叩き返された怒り、けれどそれを理由に傍観して彼から遠ざかろうとしている気がする自分、そんなものへの苛立ち。そして、知ってしまった秘密。たくさん、秘密と……そのしがらみの。ケイは知らず顔を強張らせていたようだった。ケイ、と言うコーネリアの静かな声はひどく優しくかった。

「どうしたの、ケイ。怖い顔をしてる……」

「いや。ちょっと、昔のことを思い出してて……」

ラストレアの、あの楽しかった日々。故郷の村から見上げた群星の瞬き。

「エルシアン……殿下、知っている？」

いいえ、とコーネリアは首を振った。彼女もまた王族の秘書として勤めているが、何しろ王族は数が多い。特に現国王の子息は男女合わせて五十人以上になる。エルシアンは特に後ろ楯を持たずにひっそりとした存在であった。

「ああ、あの人？　なんかちょっと……あの……」

コーネリアが口ごもったことで、ケイは頷いた。噂は流れているのだろう。

——エルシアンはおかしい。何かに潰されるように歪み、調子を崩し、自殺なのかそれを糧に同情を得たいのか、ずっと自傷行為を繰り返している。鬱に沈んだり、ひどく明るかったり、そんなことの繰り返しだ。乱調というにはひどく、そしてそうでなければどんなにか楽だろうと思わずにいられないほど、冷静で現実をしっかり見ているときがある。

「そう、エルシアン殿下。学生の時の……友人、だったんだ……」

だった、と過去形で語ったことに、ケイは一瞬後に気付いた。エルシアンのことを諦めたいことはなかったが、彼ははっきりもう会わないと言った。何故。ケイは星を見上げる。あの夜見上げたときよりも、遥かに少ない王都の星を。

流星がまた尾を引いた。それが合図だったようにケイは深く呼吸をしてコーネリアの肩を抱いた。唇を重ねると彼女が自分にぴたりと体を合わせてきたのが分かった。それもまた愛しかった。離れた唇をなごり惜しくキスでつまんでい

ると、コーネリアはケイの頬を両手で挟んで目を合わせた。

「傷ついたら駄目よ」

コーネリアがケイの目を覗き、強い光を与えながら静かに言った。

「ね、沢山の人と出会ったら、沢山の人と別れるのよ。殿下と今は疎遠でも、思い出せるものがあるって言うのは幸福よ。その幸福をずっとずっと大切にしていけばいいのよ……」

「そう、だね」

優しい声になったことをケイは自覚する。コーネリアを促してケイは待ち合わせていた公園から歩き出す。つい先週に結婚を申し込み、彼女から承諾の返事を得ていた。

「次の休暇には俺の実家へおいで。両親に引き合わせるから」

そんなことをいうと、コーネリアは緊張するわねと笑って頷いた。ケイはそれに微笑み返ししながら、故郷の夜空を思い、エルシアンのことを想った。

群れて瞬く星の下で君を思うことを、いつか幸福の記憶にできればいいと、考えながら。

【群れ瞬く星の下にて君を想う 了】

Kei - Elthane

著小話



A.D 1 - Musshal
Kei, Elthane - Idalgarns

エルシアンがミシュアルで王を名乗って即位宣言した頃の話です。本編だと戦争の流れの中で日常のことを殆ど書いてませんが、ちょっと息抜き程度の小話です。エルシアンは小器用、ケイは不器用、イダルガーンは見栄っ張り。少し文章を硬めに、「後宮小説」を意識しているのでちょっとだけ文書が違うのがご愛嬌。

ケイ＝ルーシェンは、初めてであった。

何が初めてであるかと問うならば、高級の冠のつく漢氏食が、である。彼の故郷は北部の小さな村であり、余りに小さくて漢氏町を置くゆとりさえなかった。それに北辺の田舎では彼らに対する偏見がまだ根強い。彼らもそう居心地のよくない場所には居住しないだろう。多少の知己と友人を得た今、その偏見など根も葉もないと分かるのだが、彼らの文化も風習も余りに異質で珍しいやら不思議やら、とにかく尋常でない事という認識は、変わらぬ。

ミシュアルに来る以前、王都を脱出して後しばらくイダルガーンの実家にいたことがあったが、ケイの逗留は一時的なものであって、特別の用意を出来ないのだとイダルガーンが申し訳なさそうに言ったことがある。食事の贅沢などケイは氣にとめていなかったが、イダルガーンは彼にいつか振る舞おうと思ってもいたようだ。

エルシアンがミシュアルを奪還して数日、ケイにもイダルガーンにも押し潰されるほど仕事はあるが、根を詰めすぎても良くないだろうとイダルガーンが夕食に呼んでくれた。彼が猪の如く突進するほど仕事をやっつけることに躍起になっているのを見て、心配になった、とも言える。ケイは目の前に仕事が山積していると、それを片づけぬ事には落ち着かない、多少損な性分であった。この性分のお陰でケイは実に仕事に真面目に邁進し、いつか過労死するだろうとイダルガーンは思ったのであろう。ケイの上に、天運を司る宿星を見ているイダルガーンとしては、それは甚だ都合がよろしくない。ケイともう少し話をしてみたいこともあって、彼はケイを夕食に招待した。

……どこから聞きつけたのかエルシアンが一緒なのはご愛敬であろう。自分よりもイダルガーンよりも忙しくて然るべき人物が何故か一等閑人であるのには納得がゆかないが、本日は公務ではないから、新国王陛下は最低限の護衛のみに連れられてきた。煩わしさを嫌ってエルシアンは彼らに明日の朝迎えに来るように言って返してしまっている。ちなみにリュード・ザンエルグであるが、エルシアンの言葉を借りるならば

「あ、見当たらなくてさ。どこか女の所にでも行ってるんじゃないの」
ということであった。

あまりにケイが周囲を落ち着きなく見回しているのが可笑しかったのか、イダルガーンが小さく笑って、庭でもご覧になるか、と聞いてきた。

「この屋敷も急な造営でしたので、まだ早々お目に掛けられるものも少ないが、漢氏屋敷もそう数を知らないのであれば珍しいかと存ずる。あ、――」

たまたま行き会った小間使いにイダルガーンが何事か漢語で話しかけ、小間使いが頷いて消える。すぐに連れられてきたのはランファ、漢氏名を蘭花という女であった。彼女はイダルガーンの実妹である。普段は少年騎士のような男装であるが、この日はイダルガーンが言いつけたのだろう、漢氏特有の裾の長い衣装であった。通常男装してきりりと眉を上げた彼女しか見ていないエルシアンとケイの2人には珍しい光景であった。

「こんばんわ、エル様、ケイ様。ようこそいらっしゃいました」

ゆっくりした不思議な動作で会釈をする。そんな優美な動きもできるのかとケイは少し、感心した。

「夕食が済んだらこれに庭でも案内させましょう。他にご覧になりたい場所があるのなら、遠慮なく申しつけ下さい」

「あ、いや――」

何事かを言いかけて、ケイはそれをやめる。彼を見上げたランファがにっこり笑ったからだ。

(……結構、可愛い、かも……)

妻とのことはケイはこの時点では諦めている。彼の妻の気性からして烈火の如く、怒っているだろう。王都から脱出して漢氏街にいく途中にイダルガーンが囁いてきたことも、今更思いだして彼は赤くなる。イダルガーンは彼に、ランファを貰ってくれまいかと言ったのだった。

元々ケイは気の強い女が好きだ。多少恐い思いをすることも含めて、それは麻薬のように彼を引きつける。自分の言いなりになる女など、少しも面白くもないし刺激にもならない。多少鼻っ柱が強くて思ったことをぽんぽんと口にする女の方が面白くて、愛嬌があるではないか。それに、そういう女は閨が一番面白い。ランファはその条件によく合い、さてケ

イの好みと言えた。

（あっちが駄目になったらこっちでも悪くないかもなあ）

妻もランファも、それを聞けば叩きのめされるであろう事を、彼はぼんやり考えていた。

イダルガーンの先導で食堂に入ると、既に大きめの卓には沢山の料理が置かれていた。美しく飾られた冷菜やら、一寸見たことのない謎のものまで、これほどの食膳にはそうそうお目にかかれないうであろう。ケイはしきりと感心している。エルシアンがケイの腕をつついて

「お前、こういうの初めて？」

と聞いてきたから頷いた。聞けば、エルシアンは王族時代に幾度かは口にすることがあるという。

「俺が着いてきた訳が分かるさ。……なあガーン、蟹食わせろよ、蟹。蟹は何をしても旨いからなあ」

「承知いたしました。季節ですので厨房の方も菜譜には入れていると思いますが」

イダルガーンの言葉に応えるようにか給仕をする小間使いを呼び止めてランファが短い会話をし、蒸しものと炒め物みたいね、と付け加えた。エルシアンが破顔とっていいほどの満面の笑みになる。

席に着くと軽い酒が出た。冷菜の他に、調理したての湯気をあげながら何品か前菜の追加が運ばれてくる。毒味という意味があるのかイダルガーンが最初に一口食べてからすすめるのが慣例のようであった。エルシアンもそれを知っているのか、酒を舐めながら待っている。イダルガーンが失礼をと呟いて、二本の細長い棒を片手で器用に操り、前菜をつまみ上げた。棒は指先から肘よりは若干短いほどの長さで、白くぬめらかな色をしている。材質は象牙であろう。

「どうぞ」

言われてエルシアンが手元に視線をやる。ケイも同じ事をして、……硬直した。

さてケイの前に置かれているのも先程イダルガーンが操っていたのと同じ、2本の棒である。これ以外に食事をするための、ケイの使い慣れた……というよりそれしか使ったことのないフォークに相当するものは見当たらない。スプーンと似たものはあるが、これで食せと言うことではないだろう。現実、イダルガーンもランファも何の躊躇いもなく大皿から食べ物をその棒で取り分けた後、自分の手元にあった方の棒で口に運んでいる。エルシアンは、と横を見れば、新国王も少し困った顔でイダルガーンの手元を見つめていた。ケイはほっとする。

「ガーン、これ、使い方教えてくれ」

エルシアンの方から口火を切ると、漢氏の兄妹は多少きょとんとした顔をした。2人の顔つきが、普段全く似たところのない兄妹であるにもかかわらず同じであった。やっと2人が兄妹なのだと思えて分かった気がして、ケイはなんだか可笑しくなる。

イダルガーンはそこに至って初めて、エルシアンとケイが食膳に手をつけられないことに気付いたようだった。食卓を整えたのはイダルガーンではないだろう。彼は使用人に客が来るから用意せよ、と命じるだけではあるのだ。そして客が漢氏でないと思っていなかった召使いは当然のように漢氏の客人に最高のもてなしをしようと気張ったに違いない。指示を失念していたとはいえ、その疑問に誰も気付かなかったのも運が悪い。

イダルガーンの整った顔貌に「しまった」という明らかな強張りが浮いていて、これはどうにかせねばならぬ。そうでなければイダルガーンはそれを失策としていつまでも気に病むだろうからだ。エルシアンも同じ事を思ったらしい。

「使い方教えてくれよ、お前たちのしてることを習うのもいいな、なあ、ケイ？」

こうやって気遣うあたりがエルシアンの一番の長所と言わなければならない。ケイはそれに頷いた。それに、とケイは付け足す。

「もう時間も時間だから、今から調達するわけにも行かないし……教えてくれたら俺も嬉しいよ」

ミシュアルの市街は、南から押し寄せてきた侵略者達との交戦の末に殆どが焼け落ちている。それでもぼつぼつと屋台のような店は建ち始めているが、きちんとした復興までには少しかかるだろう。それに、夜はまだ不穏だから商店は店を閉めており、この時間からフォークを調達するには骨が折れる。

「申し訳ありません、今すぐどうにかいたしますよう、ええ、どうにかいたしますとも」

ちらとエルシアンがケイを見た。ケイは頷いた。エルシアンの考えていることと、今は大筋一致している自信があった。

「いいよ、気をつかうなって。教えてくれたらどうにかなるから」

エルシアンは顔もにこやかではあったが、後ろへ引かない強さがあった。イダルガーンはランファと少し何事か相談していたが、申し訳ありませんと頭を下げてからその棒をよく見えるようにと空中へあげた。

「これは箸といいまして、我々の使う食事用の道具になります。基本的には挟んでつまむ作業ですね。2本で1組ですが、先ず利き手の薬指の……」

「お兄さま、そんな説明するよりこうしちゃった方が早いわ」

ランファが言うなり立ち上がる。いつものようにきびきびした身のこなしでケイとエルシアンの側へ立ち、ペンを持つように一本持って、といった。

「で、こうして、こうで……こうやると、ほら、持ち方は大体これで当たってるわけ。で、ここの親指と薬指で下の箸を固定して、上の箸を人差し指と中指で動かすの……あ、エル様とってもお上手」

エルシアンはなんだ分かったという顔つきをしている。ケイはといえば、なかなか上手くはゆきそうにない。ランファがケイ様大丈夫、と覗き込んでくれるが、多少なりとも彼にも見栄はあって、

「大丈夫だよ、ありがとう」

などと笑ってしまったものだから、墓穴であった。

エルシアンは器用である。小器用なんだよと本人も笑うが、大抵のことは一度経験すれば出来てしまうし、手先も割合に細かい。それでいて本人の思考が細かい計算に向かないのは不思議だが、大概彼は初めて体験することでもそれなりにこなした。

……そしてケイはそのほぼ真反対であった。計算にもそこそこ通じて思考もエルシアンの鷹揚ぶりに比べれば緻密だが、体を動かすことに関連しては天才的に不向きであるといえる。それは彼にとっては幼い頃からの習性であり、自分で自覚する欠損であった。そして誰にでも一つや二つ、自分で口にするのも屈辱的な事柄は存在するのである。

食事は再開した。但し、ケイをおおまか除いて。

エルシアンは自分で言うだけあって小器用に箸を操り、食事に精を出している。漢氏の兄妹に比べれば手つきは若干危ういが、初めて箸を扱うのならまずは合格点か。ひょいひょいと大皿から料理を取り分けて口にせさせと運んでいた。ケイはこの「箸」とやらを駆使して「物を摘む」ことを諦めた。これは無理というものであった。そのかわりケイは直截な行動に出た。箸を握りしめておもむろに料理に刺して取り寄せたのである。

一瞬イダルガーンが目を剥いた気配がした。ランファが息を呑んだのも聞こえた。どうやらこれは重大な規礼違反らしい。が、他にどうせよというのか。困惑してちらとイダルガーンを見ると、イダルガーンの方は咄嗟に視線を逸らした。これを見なかったふり、と呼ぶ。自分にも落ち度がある以上は目を瞑ろうということであろう。エルシアンはそんなことを気にとめず、自分だけ食事を楽しんでいるようだ。何故だかとても悔しいとケイは思った。

「……お、お上手ですね」

気を取り直したイダルガーンがエルシアンの箸使いを誉めている。ランファがそれに慌てて倣ったのも悔しい。

「ああ、俺は大抵のことは一度やれば出来るんだよ。昔から器用なくちで」

「初めてでそこまで出来るのであれば、次は簡単な墨絵でもお教えいたしましょうか」

「ああ、あの濃淡のやつね？ 絵はいいよ、俺はあっちの才能はないんだ」

「そうですか、しかし、本当にお上手です」

イダルガーンの頬のごく一部が強張ったままなのは、必死で彼がケイを見ないようにしているからである。何かを言いたくてたまらないのだろう。ランファの方は俯いている。肩が震えているから、笑っているのかも知れない。そんなことを思いながらケイは、彼らの視線に気付かぬふりで食事を進めようと決心した。

エルシアンが着いてきた理由は分かった。食事は口に慣れていない珍しさも手伝ってか、非常に美味に感じられた。王都で下宿していた頃は時々、安い漢氏料理の店にもいったことがあったが、流石に食材と料理人の腕と意気込みが違うと、何もかもが違う。

……ただ、唯一の心残りはこの「箸」であった。相変わらずイダルガーンはケイの食事風景を自分の視界から追い出すことに執心している。ランファも似たような態度だ。悔しくてたまらない上、自分がひどく目立つのは隣でがつがつ食事をすすめている友人の、初めてとは思えない「箸」さばきのうまさもあるはずである。ケイはそんなことを考えながら半ばやけばちに、美味を楽しみ没頭するふりをする。何故だか、神経がひどく疲れた。

五目うま煮の小さな卵に突き刺そうとしたケイの箸が滑って、卵が弾むような勢いで飛び出し、横にいたエルシアンの頬にぴしゃりと当たって下へ落ちた。エルシアンはぽかんとしたような顔つきで自分の頬を押さえ、下へ落ちた物を見た。それが卵であることを確認し、ケイを見、ケイの握りしめている箸を見て——けたたましく笑い始める。

ケイは頬を染めた。隣で「腹の皮がよじれる」といった意味のことを呟いて涙を流しながら笑っている新王を叩き殺してやろうかと、いっそ思う。そうすれば歴史も変わったことであろう。イダルガーンは相変わらずの見ないふりを決め込もうとして失敗している。顔がやはり歪んでいた。可笑しいのだろう。それでも彼は自制する分程度に、大人といえた。

「大丈夫ですか」

そんなことをいいながら、エルシアンの頬についた飛沫をぬぐうようにと布を差しだしている。エルシアンはそれを受け取り、

「お祖母さまにもぶたれたことないのに」

などとやくたいも無い言葉で更にケイの羞恥をあおるのを、忘れぬ。ころころと可愛らしい女の声が笑うのが聞こえた。ランファであった。

彼女は一瞬何が起こったかを理解できずにぽかんとしていたが、エルシアンが頬を拭っているので気付いたらしい。笑いながら彼女は言った。

「ケイ様、下手くそ！」

とどめの一撃というべき言葉であった。救いは純粋にランファが可笑しくて口にただけであって、悪意が微塵も含まれていなかったことであろう。それを聞いたエルシアンが目の端の涙を拭いながら尻馬にのった。

「ケイ様、へったくそー！」

声色まで真似る辺り、ケイの気分を害するのに十分といえた。ケイはエルシアンの膝を思い切り叩く。いてえとエルシアンは顔をしかめたが、また笑い出した。どうやら友人にとってはケイの報復よりも自分の楽しみの方が重要らしい。ケイはますます面白くない。と、ようやく己の自制心に自信を取り戻したのか、イダルガーンがケイ、といった。

「これに料理を取らせましょう。その方がよろしい。……ランファ」

「はい、お兄さま」

余韻をまだ引きずりながらもランファは頷き、取り分けるように置かれている箸を取った。どれが食べたいですかと聞かれて、ケイは少し恥ずかしい。子供のような扱いだからだ。が、先程の失態に比べればずいぶんましなことだと思い直し、指で何品かを示す。ランファは頷いて、箸をのぼした。が、これもありがちではあるが予想の範囲内であった裏目を出す。

調子よくランファはケイの指すものを取り分けていたが、不意に箸先をぶるっと痙攣させた。つまんでいるものと手が遠い位置にあれば均衡をとることも難しいし、そもそもつまんでいるものの重みを何倍にも感じる。ランファはあまりに調子よくやりすぎた。調子よくやりすぎて、あと思ったときには箸の先から鳥の揚げたものが滑り落ちていた。それはばちゃんという拍子抜けな音を立てて、ケイのスープの小椀の中へ飛び込んだ。

ケイは目をしばたいた。隣で同じようにしたエルシアンが、一瞬の間をおいて吹き出すのが分かった。ケイも仕方のな

い笑みになる。ランファはこういうことには慣れていないのだろう、おろおろとするばかりである。イダルガーンが何かを言って、ランファが我に返ったようにケイの服に飛んだスプを拭こうと布をあてた。ケイは布を受け取って自分でする。エルシアンだけが相変わらず、堪えられないという表情で笑っていた。

「ランファ！」

イダルガーンの声がした。彼は妹の失態が恥ずかしいやら情けないやらで、とにかく複雑な顔で、怒っていた。それを見たランファの顔がむくれる。彼女にも確かに言い分があるだろう。漢氏の兄と妹がしばらく漢語で話している。イダルガーンは終始仏頂面であつたし、ランファの方はふてくされて唇を突き出してつんと兄から顔を背けてしまった。叱られたのが面白くない、という顔つきである。

「何話してんのかな」

どうせこの兄妹に聞いたところで答えてもらえるはずもない。だからケイは隣のエルシアンに雑談を振った。エルシアンの返答は、何だ分からないのかよ、である。

「こんな時の会話なんてたかが知れてるだろ？」

『こういう時は箸で摘んで皿に持って行くんじゃないで、皿を料理に近づけるんだ』

『ちょっと失敗したくらいで鬼みたいに怒らないでよ、大体お兄さまが指示し忘れたのがいけないんじゃない』

『それとこれとは別だ、お前は人のせいにするつもりか』

『原因と結果じゃない、何よお兄さまこそあたしのせいでしょ』

―――っていう感じで……」

ケイは視線を感じて顔を上げる。イダルガーンとランファの2人が、決まりの悪そうな顔つきをしているところを見ると、凶星であつた。

妙に気疲れした夕飯が終わった後、暮を始めるイダルガンとエルシアンの2人を残してケイは庭へ出た。ケイには暮は分からないし、ランファも兄の言いつけに従うつもりのような様子だった。夜の庭園は灯籠の灯りのせいで、昼とは違った風情がある。池を中心に四阿や庭石や樹木などを漢氏なりの価値観で並べており、ケイには珍しい。

「さっきはごめんなさい」

ランファが籠行灯を下げながらケイに一礼した。いや、とケイはいう。それほど気にすることでもなかった。

「私もお兄さまも、うっかりしてて……漢氏街の、伊家の本邸だったら割とお客様もあったからフォークとかも揃ってるんですけど、こっちは移りたてだから。本当にごめんなさい。あの、お腹空いてませんか？ あのね、軽く手でつまめるお茶受け菓子みたいなものもあるから、持ってこさせますけど」

「いいよ、ちゃんと食べてるから。蟹、美味しかったなあ……」

但し、エルシアンがふざけて

『ほーらケイちゃん、あーんして』

などとやらなければあと3割増に美味かったろう。イダルガンはいつものようにそれを素知らぬ振りでやりすごそうと必死であったし、ランファはもう自棄気味に何に対しても笑っていた。

「エルスが悪ふざけしなけりゃもっと良かったのに」

半ば怒りで呟いた言葉に、ランファは苦笑のような声でいう。

「エル様は器用なのね。初めてであんなにお上手に箸を使う人なんてあたし、見たことないもの。ケイ様、気になさらないで。ケイ様みたいな方が普通よ」

慰められているのであった。ケイは苦笑する。

それにしても、エルシアンの態度には許せないものを感じる。イダルガンの失策をとりなすためにフォークを用意しなくていいと言った自分も誉められないが、彼がケイの失敗をああ笑わなければもうすこしましな気分でなかろうか。ケイはそれを思い出してふてくされる。エルシアンの鼻を明かすというか、度肝を抜くことで強かに報復してやりたくなる。さてケイは根に持つ方であるのだ。箸に関しての理想的な解決方法はすぐに浮かんだ。ケイはランファの肩を叩く。

「俺に、箸の使い方を教えてくれないか？」

明日の朝食で見返してやろうという考えはよいものに思われた。エルシアンは彼の不器用さに対して微塵も疑いを持っていない。今夜中に箸使いを習得すれば奴の鼻を明かしてやれるだろうと、ケイはそんな風に考えた。ランファは少し、怪訝な顔をした。

「お箸の？ いいけど、でも……」

何かを言いかけたのをケイは頼むよ、と遮る。何か理由を付けて断られてはこの計画は最初から頓挫というものであった。

「箸の使い方、覚えたいんだ。これからも時々ご馳走になりたいと思ったし、その時にそっちも気を使わないで済むだろう」

「うーん、それは、そうかもしれないけど……」

ランファの態度は何故か煮え切らない。ケイは頼むよ、と重ねて言った。

彼は後々歴史に次第に長く足跡を残して行くに連れて、持った性質をも他人によく知られるようになった。彼は相当な頑固であった。とろけるようにやわらかい物腰と態度の下に、頑として動かない一面を持っている。彼はとにかく自分の方策や指針に従わない人物や都合の悪い出来事を、一つ一つ丁寧に、執念深く、解決していくことで成功者足り得た。

ケイはそれが自分の長所であり短所でもあることを承知していた。だが、出来なかったことを挽回するにはよい、それ向きの性格であったとも言える。そしてまた頑固な者特有の病、独善も持っていた。それが国家の大事であるとか重要な決定であるとかなら彼も他人の意見を聞いたであろうが、事は個人が上手に漢氏の食事作法を再現できるか、である。誰

かの意見を聞く必要はなかった。

「分かったわ。教える」

ケイの熱心さにうたれたのかしつこさに負けたのか、恐らく後者であろう、ランファは溜息と共に言った。

ランファは切り替えが早い。特訓するというならば徹底的にやろうとも、思った。先程の食事光景を見ていれば分かる。ケイは少し神経が鈍そうだ。が、出来るまで鬼になって仕込んでやるから——そんな風にランファは決意する。2人は視線を合わせて微笑みあった。教師に熱意があり生徒にやる気があるという理想的な師弟関係が、こうして出来上がった。

特訓はランファを捜しに来た小間使いが夜中ですからと彼女を引きずって帰るまで続き、その後ケイは朝まで「自習」を行ったのだった。

寝不足ではあったが、ケイは自信満々であった。夜を徹して「豆粒を箸でつまんで隣の皿に移す」という地道で単純な作業を繰り返したが、効果は高い。自由自在というわけにはいかないが、昨晚のエルシアン程度になら扱う自信はある。「先生」にも特訓の成果を喜んで貰わなくてはならぬ。そんな事情でケイは徹夜のせいで夜食のような意味合いになってしまった朝食を、実に充実した、前向きな気分で迎えていた。

指定された食堂の隣棟の応接間へ行くと、エルシアンが既に来ていた。

「お、早いな、ケイ。目がさっぱりしてるところを見るとよく眠ったみたいだな。飲みに誘ったら寝てるって言われてびっくりしたよ、お前、昨日は優等生だったなあ」

エルシアンはケイの寝起きの悪いことを知っている。学生時代は学生寮の隣部屋同士であった。ケイは目をこすった。徹夜のせいで、多少朝日が目にきつい。

「別に、そんなんじゃないよ。お前はタベは？」

「俺？ ガーンと飲んでたけど。あいつ、朝は駄目かも知れないなあ。相当酔っぱらってたから」

「駄目だよ、お前の限界量につき合わせたら。可哀相に」

ケイはしかつめらしい顔を作って言った。エルシアンが肩をすくめた。エルシアンの酒量ときたら馬が水を飲むように限界がない。イダルガーンがそれを知らずにつき合ったとしたら彼も災難であろう。そしてエルシアンはエルシアンで、「限界量が分かってるなら節制すればいい」という考えの持ち主であったから、これを上司としてつき合う方はある程度の見切りが必要となる。その見切りをイダルガーンに求めても、土台無理な話というものであった。

果たして、ランファを伴って現れたイダルガーンの顔色は良くなかった。二日酔いか、それともそれ以前にまだ抜けていないのか。どちらでも大差あるまい。そしてランファはその後ろから、何故か逍遙とした表情でついてくるのであった。

「おはようございます、お二方」

本調子とは言えないまでも2人に気を使って微笑む辺り、このイダルガーンという男もなかなかの見栄者ではあった。ランファがそれに倣う。ちらと目線があって、ケイは自信たっぷりに笑ってみせる。と、ランファはなんだか複雑そうな顔で会釈をした。

「支度もできておりますので、ご案内しましょう。本日はそう冷えておらないので、中庭へご用意させていただきました」

昨晚のような茶番はもう沢山、せめて場所を変えようというわけであろう。

朝の庭園は昨晚の風情とはからりと違った景色となっていた。整えてあるだけ、目にはまろい。四阿は厳重に温められていて、上着を着ていると少し汗ばむほどであった。食事の支度はほぼ終わっているようだった。粥と数種のつまめる点心類が中心だが、食卓にはやはり、箸。昨晚と似たような、象牙の箸が箸置きに鎮座している。

ケイは有頂天であった。自分の正当で必死の努力の実を結ぶ瞬間が近いからである。エルシアンが彼をちらっと見て怪訝な顔をしたのも良い。実際学生時代から成績はケイの方が遙かに上であったにもかかわらず、エルシアンは彼を「馬鹿正直なお馬鹿ちゃん」と呼び、ケイの要領の悪さをからかったり含み笑ったりと遠慮なしであった。それらをまとめて叩き返す一番の秘策が箸である。昨晚の特訓のせいで右手の甲がひきつるほど痛いのが、それも気にならなかった。

席に着くと、イダルガーンが昨晚と同じように最初の箸をつけた。どうぞ、と言われてケイは早速箸を取ろうとする。あ、とイダルガーンが声を上げた。

「なに？」

何だろうと不思議にそちらを見ると、イダルガーンはこれ以上はないというくらいのにこやかな笑顔で、懷から何かをくるんだ布を取り出した。

「どうぞ、これを」

差し出されたものを受け取って開いてみると……フォーク。

ケイは一瞬二の句が継げない。何と言って良いのか分からなかったが、自分の努力はどうやら徒労と呼ぶべきものになりつつある。

「昨晚、公邸へ使いをやりまして借り受けて参りました。次に来るときまでにはこちらの方できちんと準備をしておきますが、本日は取りあえずこれをお使い下さい。昨日は気付きませんで、本当にご迷惑をおかけしました」

「あ……いえ……」

ランファは申し訳なさそうに首をすくめて、朝食の粥をかき回している。昨晚彼女が言いかけたのはこれであったのかと、ケイは悟った。差し出されたフォークをつい受け取り、ケイはそれを見つめる。イダルガーンは善意そのものという顔で微笑んでいるが、これは昨晚のような減茶苦茶な食事を目にしなくて済むのだという安堵も些か含まれているように感じた。

エルシアンにも、とイダルガーンがフォークをさしだしている。エルシアンの方は躊躇いなくそれを受け取り、やっぱり使い慣れた方がいいなあなどと言いながら当然のように食事を始めた。ケイはその様子を見る。視線に気付いたのかエルシアンがケイを見、何だよ、といった。

「食べないのか、ケイ？ ……せっかくフォークまで取ってきて貰って……」

そこまで言いかけて、エルシアンはふと目元をゆるめた。

「……まさかとは思うけどお前、徹夜で箸の練習したとかじゃないだろうな？」

ケイはざくりとする。エルシアンの勘の良さはいったい何であろうか。頬が瞬間引きつったような気がして、慌ててケイは満面の笑みでフォークを握った。

「ままままま、まさかあ。そんなこと、するわけ、ないじゃん」

「……そうだよなあ。まさかなあ。フォーク取ってくればいいだけの話なのにさ」

何か、見透かされているような気分であった。

「そうだよ、大体、箸が使えるからってどうってわけでもないし」

慌てて付け足すと、エルシアンはふうん、と呟いて今度こそ楽しそうに、心底意地悪そうに笑った。

「朝になればどうにかなるって事にも知恵が回らないで必死で練習するなんて、二十歳越したいい大人がやることじゃないし、大体、飲み会も断って徹夜で一人で練習してたら馬鹿みたいだもんな。もちろん、ケイはそんな馬鹿じゃないから当然昨日は疲れて早く寝ちまったんだろうけど、時々世の中にはそういう馬鹿がいるから困る。お前は違うだろ、ケイ？」

「も、勿論」

そうだろうとも、とエルシアンは明るい笑顔になった。ケイは似たように見えるはずの笑顔を作った。が、心中穏やかというわけでは、勿論ない。どれかというなら昨晚よりも遙かに殺気に近いものを、エルシアンに感じている。

お前なんか、大嫌いだ！ 苦虫ごと朝食を噛み潰しながら、ケイは口の中でそんなことを呟き続けた。

さて、ケイと箸の顛末はこれで終わる。これ以後ケイは漢氏邸での食事に招かれたときは自分用のフォークとスプーンを持って出かけるようになった——かは、記録に、ない。



例えば それも愛だとすれば

A.D 2 - Zaxlia
Soulmgard
Reudo vs. Idalgarns

エルシアンがザクリアへ凱旋し、皇帝を名乗って即位を果たした頃。イダルガーン VS. リュードが読みたいというリクエストにお応えして書いたもの。視点はソール少年です。彼も本編では後半いろいろあるので、明るくて屈託ない彼を見ていると感慨が…… 兄がしたこと→イダルガーンの従弟を拷問にかけたこと、です。

新年の準備も大詰めになってきて、王宮はばたばたしている。兄は、今年は駐屯地での新年になりそうだということらしい。一緒に戦線を張っているサファ将軍が、シエルナ軍閥の方で新年に何かあるということで本日帝都に戻ってきたのだが、その時に兄の様子の報告と一緒に兄からの手紙を貰った。

「元気でやってるから、安心しなさいね」

サファ将軍はそう言って執政宮の入り口まで迎えに行った僕の頭をぼんぼん叩いたのだが、僕は色んなことが心配だ。兄は……何ていうのだろう、祖国では王子の側近を務めていたし、陛下の信頼も厚い参謀官で戦術や戦略のことなどはイ将軍も納得してくれたほどにちゃんとした人なのだが、こと生活という狭い範囲に限定して話をすると全くちゃんとしていない人なのだ。

洗濯物は放りっぱなし。シーツは敷きっぱなし。枕はへこみっぱなし。食器は置きっぱなし。物は出しっぱなし。兄に任せて家を空けるとわずか10日で、「獣道くらいならある」という部屋の状態に陥る。料理など出来るわけもなく、例えば魚のスープに塩と間違えて砂糖を入れてみたり、火加減という物を知らないから生焼けだったり焦げていたりその両方だったり。とにかく、生活能力者としては兄は最低なのだ。

「身の回り、片付いてますか」

それだけが気になる僕も僕なのだが。

「駐屯地の天幕に副官もいるからね、彼女がせっせと片付けてるわよ。あんたはお兄さんのことは心配しなくていいから、ケイの心配をしてあげて頂戴な」

僕は思わず笑ってしまった。陛下の、と言わないところがやっぱり側近なのだと感じ入ってしまうのは、実はその通りのことが起こっているからなのだ。僕が笑ったのを見て、サファ将軍は肩をすくめて悪戯っぽい顔になった。

「陛下はミシュアル領主だった頃からちーっとも変わらないわね。あの頃だって側近がわたわたしてさ、本人は知らん顔でしょっちゅうどこかほっつき歩いてたんだから」

「サファ将軍は陛下をよく御存知なんですね」

僕が言うと、将軍はどうかしら、と首をかしげた。

「あたしなんかよりもずっとケイやイ・ターレンの方が知っているはずだけど」

ターレンというのは漢氏の尊称のようなもので、イ将軍とかイ・ターレンとか呼ばれている人のことは日常、イダルガンという名前で通る。陛下やケイ様はガンと呼んでいるみたいだけれど、その二人以外にイ将軍を愛称で呼ぶなどという恐ろしいことを出来る人間を、僕は生憎知らない。

「お二人とも、陛下とは長いんですものね」

「実はザンエルグ公の方が付き合い自体は長いはずだけどね」

ふん、とサファ将軍は鼻を鳴らした。サファ将軍はあんまりリユード＝ザンエルグ騎士公伯がお好きでないのだ。もっとも公伯も将軍を煙たがっているみたいだから、おあいこなんだろう。と、いうわけで将軍の発言を主観に近く書き換えるなら、長いのは期間だけだけどねっ！……という感じだろうか。

「じゃあサファ将軍はそのお三方の内、どなたが陛下のことを一番御存知だと思います？」

「そうねえ……どうだろ？ 仲がいいのはケイだけど何か相談するのはイ・ターレンだし、遊び回るなら公伯って感じだからね——そんなこと気になるわけ？」

「僕、あまり陛下のことを存じ上げないので……執務の時にも、本当は僕が気を使わなくちゃいけないんですけど、逆に僕の方がいたわってもらってしまって、何ていうのか、もう少し陛下の気配をちゃんと分からないといけないって思ってるんです」

言いながら僕は恥ずかしくなってきて、俯いてしまった。陛下の執務には勿論複数の秘書と副官がついているわけで、僕は更に細かい雑用だとか陛下のお気向きの時に話し相手を務めたりするだけなのに、時々泣きたくなるほど何も出来ない気がする。

「なので、新年の儀式が開けて仕事が再開される頃にはもうちょっとましになっていたいんです」

真面目に言った僕に、更に真面目な顔でサファ將軍は答えた。

「陛下のあしらい方ならケイに聞きなさい。イ・ターレンは甘やかしてるだけだから、その点全くダメ、ダメの見本。あんたもあんなっちゃダメだからね。それと公伯にそんなこと聞いたら骨までしゃぶられるから気をつけなさい」

「あの……僕が聞きたいのはあしらいかたではなくて付き合い方なんですけど。イ將軍も今年の冬はお戻りになるって聞いているので、一番よく御存知な方に色々とお話を伺えたらなあって……」

「あら、面白そうな企画」

うふふ、とサファ將軍は笑う。企画ですか、と僕は聞き返した。

「そうよ。陛下の側近とその秘書とか副官とかに聞いて回って投票とりましょ。で、あんたはその結果を見て弟子入りすればいいんだし、外野はそれで1杯飲めるからね。あ、あたしはケイに1票」

僕は曖昧な返事をした。それって……いいのだろうか。変な人気投票の片棒を担がされるのは遠慮したい。僕があまり乗り気でないのを見て、サファ將軍は僕の肩を抱いて耳元で言った。

「それにさ、他の連中がどう思ってるのか、あんた知りたくない？　つまり陛下は誰の言うことを一番良く聞いているのか、ってことじゃないの」

「あ、そうか……そうですね」

僕は頷いた。そうでしょ、と満足そうにサファ將軍は笑い、そして僕の耳を抓った。

「あんた、今、あたしのこと避けたでしょ。あたしはねー、あんたみたいなすっかすかの鳥ガラみたいなのはき・ら・い・な・の。食べるところもありゃしない」

「じゃ、イ將軍みたいな方が好みなんですね」

これは勿論冗談なのだけど、サファ將軍が同性愛者であることはたった1名を除いて誰もが知っている事実だ。といっても將軍が乙女に恋するお相手以外はあんまり目に留めないのも本当だから、普段はあんまり意識はしない。……ものの、いきなり肩を抱かれたらびっくりするのも確かだ。

サファ將軍はにんまりと笑った。

「彼か……顔と体格はすごく好みなんだけどね、出会ったのがミシュアル戦線でさ。口説く暇も無くってねえー……あー……彼があたしに取りすがってあんあんよがってくれたらなあ……」

この人、本物なんだな……

僕は少し遠い目をした。

サファ將軍が戻ってきてから4日目にイ將軍が最北の前線ラストレアから一時休暇ということで帝都に姿を見せた。サファ將軍が好みだという言葉に照らしたとおり、イ將軍は見上げるほど上背があって、きりりとした雰囲気と甘さのない凛とした顔立ちの、男性としては実に正統派の、役者みたいな美形だ。対比して美形だというならやっぱりリュード護衛官長で、こちらはイ將軍とはほぼ正反対の華奢な体つきと匂い立つように甘い、華やかで気品ある顔立ちに洗練された立ち居振る舞いが混ざり合って独特の雰囲気を放っている。女性に人気があるのはリュード官長なのだけど、彼は派手な火遊びが好きらしくてそんな噂が絶えない。本人はというのにやにや笑っていて否定するでもないから、多分大体本当なのだろう。

そんなことを僕が考えているのは執務室に陛下と、イ將軍と、護衛担当としてのリュード官長が揃っているからかも知れない。年末の処理でケイ参議官はゆっくり雑談している暇などないが、多分顔は出すだろう。未裁書類をたらふく抱えて。

僕がお茶を出すとイ將軍は座ったままで僕に視線を流して軽く頷いた。僕は何となく、この人が怖い。身に付いている空気が厳しいこともあるのだろうけど、何よりも、兄が彼の身内にした行為のことを、まだ許されている気はしないのだ。陛下が兄に戦力を与えて南部へ出したのも兄とイ將軍との間にある、どうしても消化しきれないわだかまりを配慮して下さったからなのだろう。

「ガーン、帝都にはいつまで」

陛下がそう切り出すと、ふっとイ將軍の気配が僕から逸れて柔らかに変化した。イ將軍は陛下の忠実な家臣……の枠を越えてしまいそうなほど、陛下に惚れ込んでいる。夢中という表現がこの際適正かどうかはさておき、大体目つきが違う。最愛の恋人とか息子とか弟とか、被保護者に向けるための許容の塊みたいだ。陛下もリュード官長やケイ参議官となさるような下世話な雑談を殆どしない。甘えているし甘やかしているとサファ將軍は面白くなさそうだったけれど、イ將軍は陛下にとって——喩えが適切かどうか微妙だけど——父親か、少し年の離れた頼りがいのある兄ぐらいの位置にいると思うのだ。

陛下とイ將軍がお話に入ってしまうと、僕は呼び鈴だけを残して退出した。本当は護衛とか公正とか、そんなことを加味して誰かが残ってはいけないのだけど、イ將軍が陛下をどうこうなさるということは太陽が西から昇ってもないと断言できる。その点はリュード官長も同じ考えだったらしく、僕が退出するのに合わせてその場をひいた。

「ま、久しぶりだから好きなだけベタベタすりゃいいさ」

官長はそんな風に肩をすくめている。久しぶりと官長が言うのも当然で、イ將軍はほぼ1年近くラストレアで反乱軍やら他国の軍やらと対峙してきた。それはもうほとんど後の事務処理を残すだけだから、大まかな報告と共に今後の正式な立場というやつを追認しようということで今回は新年に帰投となったらしい。

「本当に仲がおよろしいんですね、陛下とイ將軍って」

僕はそんなことを呟き返ししながら官長と同じように肩をすくめた。妬ける、というのとは少し違うのだけど、あのお2人が仲がよいことにちょっとだけ寂しさを感じるのは僕がまだイ將軍を怖がっているせいだろうか。陛下の方は全くそんなことがないのだけど、將軍の方は雰囲気が厳しくて、とても気安く寄っていけるような人ではないのだ。兄のことも僕の気を重くしているのは確かだし、イ將軍が陛下のお側にいると僕は安易に近寄っていけないからかもしれない。僕の思考が聞こえていたようにリュードが官長がふん、と鼻を鳴らした。

「エルシの奴は元々、少し年上の同性に弱いんだよ。子供の頃から知ってるけど、イ・ターレンに対する態度ってやつはまさしくアスファーンへのそれがすり替わっただけだからな……おんなじ懐き方しやがる」

それが面白くないのだろうか、リュード官長は大きく溜息をついた。アスファーンというのが勿論誰であるか僕は知っている。陛下の仇敵で異母兄にあたる人だ。僕はまるきり会ったことがないのだが、陛下の周辺の方々は殆ど旧王国の重鎮だったり王国の官吏だったりで、アスファーンを知っているらしい。ケイ参議官は昔、アスファーンの筆頭秘書だったとも聞いている。何にしろ、良く知らない人と良く知らない期間の話は僕には出来ない。僕が黙り込んだ理由を官長

は何と思ったのだろう、お前さあ、と僕の背を叩いた。

「アスファーンのことは何であれエルシには聞くなよ。藪蛇ってもんだからな」

はい、と僕は素直に頷く。官長は陛下と子供の頃からの付き合いがあるから、僕の知らないことを沢山知っているのだろう。僕の返答に満足そうに官長が笑っていると、内国府の従僕が廊下の向こうから来るのが見えた。

その手にあるのは……例の人気投票の回覧だ。ばっちり、官長の名前も載っている。慌てて駆け寄ろうとしたとき、僕は思いきり転んでしまった。僕の反応を見て何かあると踏んだ官長が、僕の足を引っかけたのだ。従僕から回覧を取り上げてざっと目を通し、官長はふうん、と鼻を鳴らして笑った。こんな時の官長は『筆舌に尽くしがたいほど』底意地の悪い顔をする。

「面白そうな企画だな、ソール君？」

「返して下さい……よう……」

僕は手を伸ばすが、さっと官長は腕を振り上げてしまう。僕は官長の周囲をぴょんぴょんウサギみたいに跳ね回って、結局『イ・ターレンにも見せちゃおうかな』などというこてこてな脅しに屈してしまった。

(リュウはゆすりと脅迫は世界一)

そんな陛下のお言葉が脳裏を駆けめぐっている。官長は窓際で後れ毛を書き上げながら回覧をじっくり吟味している。僕は叱られた子供のように、馬鹿みたいにその前に突っ立って、官長のお言葉を待っている。

「趣旨は分かった、趣旨は」

そんなことを言って官長は不機嫌そうに笑った。

「だが俺の方がイダルガンのおっさんよりも票が少ないことは納得行かない。俺はどんな下らない勝負にも全力を尽くすことにしててね——おい、ペン持ってこい」

気に入らないとなればイ・ターレンという敬称から単におっさんになるらしい。大人しく言いつけに従って秘書官室からペンとインクを持ってくると、官長はおもむろに自分の得票の箇所に出鱈目な署名をもの凄い勢いで書き始めた。折角の回覧があつという間に水の泡になってしまうのを僕は切なく見つめる。官長は満足そうに笑うと僕にそれを返してくれたが、多分、この企画はもう使えないだろう。

「下らないことすんな、エルシの奴の素行不良なことは俺が一番良く知ってる」

官長の間違いじゃないんですか、とうっかり聞き返すところだった。僕はごくんとそれを飲み込んで溜息になったが、僕の表情で官長は大体を分かってしまったらしかった。勘のいい人ではあるのだけど、こういうときは呪いたくなる。「イダルガンのおっさんよりも俺の方がずっとつきあいが長い。あいつの馬鹿さ加減に本当に良く付き合ってる。マルチャの時もアネッサの時もハルナの時もラータの時もフェテラの時もミリナもジェリカもナナミもユーラもあのお嬢様だって取り返しただけでぶうぶう文句言いやがって——他にもいたはずだけど名前覚えてねえな」

……これは全部女性の名前なのだろうか？

「あの、官長、意味が良く分からないんですが……」

「ああ？ 要するにだな、エルシの奴は俺が目付けた女を横からさらうのが趣味だって話だな。更に要約するならば、お互いの恥部と恥部を握り合った真の友」

「……官長、本当に意味が分かりません」

リュード官長はにやりと笑った。

「イ・ターレンよりも俺の方が奴から沢山御下賜を頂き光栄至極という意味だよ」

下賜というのが具体的に何を指すのか良く分からなかったものの、僕にも一つだけ分かることがある。

……官長は、ゆすりと脅迫は世界一です。

官長が滅茶苦茶にしてくれたお陰で投票は一時中断したが、ようやく再開した。サファ將軍の目が怖いからだ。官長から取り戻した回覧は、官長が書き連ねた署名を同じ筆跡を頼りに消してみると結構面白いことになっていたのが分かった。イ將軍が確かに多い。そしてリュード官長もご自分では不満だったのだろうが、イ將軍とあまり変わらないくらいに票がある。……そしてケイ参議官は1票。サファ將軍のそれだけである。

無理もないかも知れない。ケイ参議官は陛下のことを御存知というよりは、陛下がケイ参議官のことをよく御存知といった感じなのだ。そうでなければあんなにはならないよというのが大抵の意見で、僕も実はそれに賛成である。ケイ参議官は……兄が生活能力欠落者であるとするなら、ケイ参議官は生活と仕事の均衡を測る能力が欠落している人だ。あんなに真面目で熱心で、しかもそれをいいように利用されている人を僕は他に見たことがない。

陛下も本当によくケイ参議官の性質を御存知で、例えば新しい法案だとか内政の方向や方策を探るときに適当に法律上の問題点だとかを指摘して、ケイ参議官に相談なさる。で、ケイ参議官の方はその問題点だけでなく解釈だとか立案だとかまでを回答として準備するのだ。それをせずにはいられない完全主義者なのだろう、可哀相になるほど。

年末の押し迫ったときだからこそ、忙しい副官たちや侍従たちの間でこの回覧は好評だった。みんな息抜きが欲しいのだ。それにサファ將軍の言った通り、外野はこれを肴に一杯飲めるとのことらしい。新年会で投票を締め切るということにして、僕はそれを積極的に集めて回った。締めきりに迫れば迫るほど、イ將軍が順調に得票を伸ばしていくのは壮観だった。これもまあ、当然かも知れない。何しろ陛下がイ將軍に夢中だ。いわゆる、朝から晩までご一緒というやつ。

官長はだからあまり機嫌が良くない。この回覧のことも気になっているらしく、時折見せるとうるさく言ってくる。けど、大体は色んな部署を回遊中で手元にないから僕はそれだけ告げて安穩とした年末を迎えている。

「だいたいそんなに一緒にいたけりゃ奴を呼び戻して俺をラastreアへやればいいんだ」

そんなことまで呟いている。官長のぼやきに陛下は……ご機嫌に笑ってそうしようか、などと助長する始末だ。どこで耳に入ったのか回覧はイ將軍もご覧になったようで、あまり陛下のお耳に入れることではないなと言いながら、官長とは対照的に將軍はご機嫌だ。多分自分の方が票が多いからだろう。官長の方が多かったら、ラastreア戦線が一段落ついたので帝都に戻りたいとか言い出すに決まっている……とは、サファ將軍の意見だけど。

でもイ將軍がご機嫌がよろしいことは、僕には良く作用した。將軍が良く陛下となさっている白黒の石を並べる良く分からない遊び——碁、とか言っていたような——を教えて下さるのだ。

「陛下のお相手につとまるなら、それもよいだろう」

ふっと和んだ目元が意外に優しく、こんな風に僕に笑って下さるのは初めてだったし、僕は本当にほっとしたのだった。

大祓礼といわれる一年の災厄を纏めて浄化するとかいう宗教行事を終えて、あとは新年の夜会を待つだけの夜、ようやく回覧は僕の手元に戻ってきた。途中からそんな予感にはしていたものの、イ將軍が圧勝。年末あれだけ陛下がお手元にお呼びになったのだから僕はこの結果には驚かない。ちなみにケイ参議官には例によってサファ將軍の1票しか入っていないのも仕方ない。何故ならこの年末、参議官は殆ど執務室に籠もりきりで、まだ12月の日が浅い頃にはご自分で書類をお持ちになって陛下に説明をなさっていたのだけど、それが次第に来なくなり、書類にそえられたメモが増え、メモの字がだんだんよろけていくのを見ると大体どんな状態かは分かる。イ將軍やサファ將軍が戻られて連日華やかに催されている夜会にも、祭礼や儀式に関する閣議にも殆どケイ参議官は顔を出さなかった。事実としては出せなかった方だとは思うけど。元からそう強烈に主張する方ではなかったのと合わせてどんどん存在感が薄くなっていったのは、事の必然という奴かも知れなかった。

戻ってきた回覧をサファ將軍にお目にかけようと僕は夜の回廊を歩いた。新年の会は夜明けと同時の陛下のお言葉から始まる。やや早めに退ける宴席を設けて置いて、新年会に出席なさる方はそのまま王城に泊まり込むのが普通だそう。先程陛下の方は精進潔斎のための特別礼拝に入られたから、しばらくは僕たちは自由な時間である

サファ將軍は待合室で他の方々と歓談中だった。ケイ参議官のお姿もあるが、参議官は一人掛けの椅子の上でうとうととしている。お久しぶりに姿を拝見した気がするが、思ったよりは顔色も良かった。イ將軍が僕に気付いて手招きして下さる。以前よりは苦手意識も楽になって、僕はそちらへ歩いた。

「例の、結果が出ているだろう？」

当然のように手を差し出されて、僕は頷いて回覧を差し出した。イ將軍が第1位なのだから見せても構わないと思ったのだ。將軍はやっぱり機嫌良く頷き、それからケイに入らないのはおかしいんだがね、と呟いた。全員の意見である「ケイ参議官のことを陛下がよく御存知」を披露すると將軍は少し笑ってから曖昧に頷いた。

「ケイは目立たないが物事の核は心得ている。……リュード殿は陛下のよきご友人だが、ケイは加えて為政の相談者でもあられるのだから」

イ將軍はそんな事を仰有って、共用に置かれていたペンでケイ参議官の所にご自分のお名前を書いた。將軍はケイ参議官がお好きなのだろう。

お前は、とペンを渡されて僕は少し考える。実は僕の名前はまだどこにも書いていない。何ていうのか、イ將軍もリュード官長も甲乙つけがたいというか、迷うところなのだ。イ將軍のご意見に反対する訳じゃないけど、僕もケイ参議官に関してはみんなの言うことが大体あたっていると思う。僕が考え込んでいると、後ろからいきなり負荷がかかった。

「ソール君は、勿論、俺だよな」

官長、と僕は慌てて回覧を後ろ手にするが官長はさっと取り上げて一瞥し、不機嫌そうに笑った。

「不公平だな。大体この『一番よく知っている』とかいう基準が曖昧なんだよ」

自分が勝っていたら言うことは違うんだろう。

「まあこんなものは遊びですから」

イ將軍はなだらかに対応しているが、多分、こっちも負けていたら違うんだろうな……

僕は黙って退散しようとする。この場で投票するととんでもない目に遭いそうだった。リュード官長の味方をすれば囲碁教室はお流れで、イ將軍の味方をすれば新年が明けて通常の執務に戻った頃から官長は僕をねちねち苛めるに違いない。その両方とも容易く想像できるから、僕は目立たないようにそうっとお二人の間から抜けようとした——が、こういうことは官長は勘がいい。本当に呪いたくなるほど。

「おい、どこ行くんだよ。お前の投票が終わってないぞ」

襟首を掴まれて僕はあの、と言った。

「そろそろ礼拝が終わるから、お迎えにいかなくちゃいけませんので」

「じゃあ名前書いてから行けよ。それくらいの時間はあるだろ」

官長の目が『絶対逃がさないからな』と訴えている。イ將軍の方はやっぱり余裕のままで笑っているが、この笑みもちょっと怖い。勿論自分に投票するんだろうと言われているようだ。ここは間を取ってケイ参議官しかないのかもしれない。僕はペンを握ったままお二人の顔をちらちらと窺う。官長も將軍も、言い出したら退かない人なんだよな……

「何、それ」

後ろから声が掛かったのはその時のことだった。僕はびっくりして回覧を取り落とした。眠っていたのだと思ったケイ参議官がまだ目をこすりながらだけどそれを拾い、ざっと視線を流していく。大体読み終わったのだろう、参議官は小さく笑って僕の手からペンを取り、

「これじゃあんまり自分が可哀相だ、こんなに働いてるのに」

といいながら自分の名前を自分の欄に書き込んだ。

「……秘書とかが何かこそこそ話しているとは思ったけど、これだったんだな。……あれ、何だよ、エルスに聞いてないじゃないか。本人に聞かないでどうするんだよ」

ケイ参議官はそんなことを言い、なあ、と他の2人に同意を求めた。リュード官長とイ將軍が首を振るのは殆ど同時だった。

「あいつは絶対誰にも投票しないね。賭けてもいいぜ。みんな信頼してるとか大好きだとか、そんな感じでお茶を濁すね

、絶対」

「その点、同意見ですな」

ケイ参議官は軽く頷き、そして笑った。

「じゃあいいよ、賭けようか。2人は誰にも投票しないってことでいいんだな。――俺は奴は『足りない』と言うと思うね」

「足りない？」

僕は参議官を見つめた。そう、参議官は悪戯っぽく笑い、僕の肩を叩いた。

「そう言うわけで、そろそろ時間だとも思うし、連れておいで」

言われて僕は初めて陛下をそろそろお迎えに行かなくてはいけないのだと思い出し、失礼しますとお3方に一礼して礼拝所に急いだ。

陛下の潔斎は少し長い。皇帝は地上に於ける神の代理人、だそうで、普通の人とはやっぱり違うらしい。僕にはこの国の宗教のことは良く分からないけど、陛下があまり熱心に信仰をなさる方ではないのは知っている。無神論というのとはちょっと違って、単に面倒だというのが理由の大半だと思っているのだが、如何だろうか。潔斎の終了にはどうにか間に合って僕は軽く会釈しながら、出てこられた陛下の足下を照らすための灯りを持った。

「お早う、ソール」

陛下はまだ少し眠たそうだ。新年会というのは夜明けを待って始まるもので、だから普段なら遅い就寝となる時間に起こされるのだから無理もない。

「ケイは出てきている？」

「はい、ちょっとお疲れ気味ですけど」

僕の返答に陛下は少し笑い、僕の肩をいつものように叩こうとして手を引っ込めた。新年の宣言が済むまでは祓っていない他人に触れるわけにはいかないらしい。司祭がうるさいからなあ陛下は苦笑し、ケイ参議官の様子を聞いた。

「あいつ、何であんなに働くのが好きなんだろうなあ……」

歩きながら陛下はそんなことを言う。ケイ参議官がこの場にいたら絶対にただじゃ済まない台詞だ、と思っていると陛下は僕の顔を見て華やかに笑った。

「……と、俺が言ったことは奴には秘密だからな。新年に休むために年末必死で働いたはずだから少しは休ませてやらないといけないけど……賭けてもいいけど奴は明後日くらいから執務室で何か始めるよ。学生だった頃も、試験の2ヶ月前からこつこつノート作る奴だったからな」

「……陛下はケイ参議官とは長いんですね」

まあ、と陛下は笑って少しばかり遠い目をした。

「年月で長いのはリュウなんだけどね。学生寮で一緒だったのがケイは大きいんだろうな」

ラストレアでの学生時代を思い出すのか、陛下は懐かしげに笑った。当たり前だけど僕の知らない時間の遠い気配が、何だか羨ましい気が少しだけした。

「陛下はじゃあ、ケイ参議官を一番にご信頼になってるんですか？」

僕が聞くと、陛下は少し怪訝に眉を上げた。この方は普段から、こうした仕種のの一つ一つがどこか絵画みたいにぴたりとなる。こればかりは陛下特有だ。他の誰も真似の出来ない、その場で単純に笑ったり喋ったりするだけで確実に空気の色が変わるような、そんな匂やかさ、というか。

「ソール、俺が誰を一番に信頼しているとかいうのは意味がない。みんな、一人一人役割と責任が違うんだから。いいね」

それでもぴしゃりと叱られて、僕はごめんなさいと呟いた。陛下の仰有ることも良く分かったから、申し訳なかった。僕が黙ってしまったのに気を使って下さったのだろう、陛下は少し明るい声で分かったらいいさ、と笑った。

「俺はリュードに立法を任せる気はしないし、ガーンに女がらみの相談なんかしないし、ケイに軍隊を指揮させようとは思わないってことだよ」

「……何だかすごく怖い想像になっちゃいますね」

だろう？と陛下は笑った。僕は頷きながら、陛下は誰にも投票しないと言ったイ將軍とリュード官長の言葉の正しさを実感した。……というか、ケイ参議官の『足りない』って、何だろう。

陛下が待合室にご到着になると、ケイ参議官が軽く手をあげた。イ將軍は会釈をし、リュード官長は頷いている。待合室の隅の椅子でサファ將軍と何かお話になっていたシエルナ將軍が立ち上がり、一礼するのを陛下は手で押さえた。

「久しぶり、ケイ。生きてたな」

真っ先に陛下が口にしたのはそれだった。ケイ参議官はまあね、と軽く笑い、エルス、と例の回覧をひらひらさせた。

「お前は誰にする？ 投票の話を今、２人としてたんだ」

ケイ参議官は他のお２人と頷き合う。投票と聞き返す陛下にほら、とケイ参議官が例の回覧を差し出した。それを陛下が受け取る。

「——何だよ、これ」

中身をご覧になった陛下のお顔が少しだけ不機嫌に曇り、やがてそれは確実にご機嫌を損ねたようだった。大きく溜息をついて、首を振る。

「.....ソール、お前がさっき言ってたのはこれのことか？ 全く、こんな下らない企画、一体誰が思いつくんだよ」

リュード官長が指で、イ将軍が視線で、僕を刺した。陛下の視線が戻ってきて、僕は俯く。先程ちょっと叱られたばかりで恥ずかしくて仕方がないのだが、でも嘘をつくことでも言い逃れをすることでもなかった。

「.....済みません、僕です.....」

陛下は少しの間、黙っていた。僕は本当に陛下を怒らせてしまったのかとますます小さくなって下を向いた。何を仰りたいのかは分かる。さっき回廊で言われたことをそのまま、今口になさる気にもならないのだろう。僕は本当に自分が情けなくなってきたもう一度、済みません、と呟いた。やがて陛下が苦笑したような吐息を漏らした。僕は顔を上げる。回覧を見ながら陛下は仕方なさそうでもあるが、確かに笑っていた。

「.....お前、人気ないなあ、ケイ」

そんなことを陛下が言うと、ケイ参議官も苦笑するのだった。

「みんな、真の実力者が誰か知らないんだよ——ところで俺たち、お前が誰に投票するかで賭をしてるんだけど」

「ふうん.....じゃあ.....足りない」

あ、と僕は顔を上げた。ケイ参議官が僅かに口元を痙攣させた。あれは通称、してやっтарいの顔、と呼ぶ。ちらっと残りのお二方を見やると、官長は青くなり、イ将軍は僅かに顔が引きつっている.....一体何を賭けてしまったのだろう。足りない？とケイ参議官の促しに応じるように、陛下はやはり共用のペンを取った。

「足りないよ」

陛下は繰り返すと、回覧の一番下にペンを置いた。くるくるペン軸が回っている。僕はそのお手元を見つめ——そして陛下、と呟いた。何だか鼻の奥がつんとする。ソルムガード・ビリア。それは僕の名だ。陛下は僕の名前をケイ参議官の下に書いて、回覧の残りの余地一杯にご自分の署名を大きくなさった。

「俺は彼が一番だと思うな」

陛下はそう言って、柔らかく笑った。僕は.....情けない話だが、胸が詰まってしまって何も言えない。ソール、と言われて僕は頷き、何度も何度も頷いて、陛下から回覧を受け取った。

「これはお前が持っておいで。次に何か企画するなら計画の時から俺に相談するように」

「——はい！」

僕は元気良く返事をし、ケイ参議官を吹き出させた。.....陛下は釘をさしたおつもりだったらしい。

微かに遠く、鐘の一声がした。払暁を告げる音に陛下が玉座から立ち上がる。陛下の良く通る声が新年の幕開けと慶賀を告げると万歳三唱が起こった。僕は陛下のお側にいて細々したことを助ける役割のために、玉座のすぐ脇に膝を突いている。本当は臣下はこの段に登ることは出来ないのだが、僕のような役割を果たす侍従だけはそうしてきたという。他にも数人陛下の身の回りのことをする侍従はいるのだが、選ばれたのは僕、なのだ。

陛下が新年の祝辞を受け取るために段を降り始める。陛下の引きずる衣装の裾を持って足さばきをお助けしながら、僕は陛下についていく。と、ふと陛下が足を止めて僕の頬を軽く撫でた。

「あ、今年も色々よろしく」

陛下の御手が最初に触れたのが僕であることに気づき、僕は嬉しくて大きく頷いた。陛下が頷き返して笑う——眩暈がしそうだ。

例えば雄々しく男性的な美丈夫というならイ将軍で、繊細で華麗な美青年というならリュード官長だろう。けれどそのお二人を側に置いてなお、人目を引くのは陛下なのだ。眩しさ、慕わしさ。きらめく熱線のまっすぐな瞳たち。僕を含めて人々はみんなそんな風に陛下を見つめている。それを身につけて、ますます陛下を取り巻く空気が明るくなっていくのも分かる。はっきりと見える気さえするのだ。何がそんなにそうさせるのか分からないけれど。でも、少しづつ表現の違う好意の根が一つで例えばそれも愛だとすれば、陛下ほど愛されている方は他にいないと思うのだ。

そして僕は自分を幸福だと思う。陛下は役割や責任と仰有ったが、陛下が深く心を預けておられるのはやっぱりケイ参議官やイ将軍などといった方々で、僕ではない。僕のことは可愛がって下さるが、それは信頼とはちょっと違うことだ。

にもかかわらず、陛下が足りないと言って下さったことが本当に嬉しい。だからこそ嬉しい、というのは確かだった。兄に手紙を書こう、と僕は唐突に思った。僕が陛下のお心の隅に入れてもらっていることを告げて、兄に無理をしなくていいのだと言わなくては。僕たちはたった2人の肉親同士なのだから。

新年の祝賀が一通り終わるとそのまま新年会に入る。儀礼用の重たくて裾を引きずる衣装を嫌がっていた陛下はお召し替えが済んで、せいせいしたという面持ちでケイ参議官と酌み交わしている。僕が新しいお酒と肴を運んでいくと、意地悪、という陛下の笑い声がした。ケイ参議官が肩をすくめ、それから僕に気付いて盆を受け取って下さった。

「さっきの、参議官の仰有るとおりでしたね」

僕が言うと、ケイ参議官は上機嫌に笑った。

「ま、そんなものだよ。それより面白いものが見られるから、もう暫くここにおいで」

僕が首をかしげると、陛下が補足を下さった。

「さっきの賭け代の話だよ。俺が誰に投票するかっていう、あの話」

「……何を賭けたんです？」

「女装」

ケイ参議官は自分で口にして吹き出された。陛下が天を仰いで呼吸困難になるほど笑っている。僕は……悪いが一緒になって笑ってしまった。

「……ガーンは俺に票を入れていたので女装だけは勘弁してやった」

参議官はそんなことを言って、それを陛下とさんざん肴にし始めた。ちなみにイ将軍は女装の替わりに僕たちと同じような服を着ることで合意したという。

「あ、ほら来たみたいだ」

ケイ参議官が人混みの向こう側を指し——

いや、これから先は僕の胸の中にしまっておこう。

お二人の名誉のために。

【例えばそれも愛だとすれば 了】



翼在る場所

O.D 214 - Zaxlia
Elthane - Assfarrne

「自由の翼」で大体発端は書いたのですが、これはその「自由の翼」の中の時間の切り抜きにあたります。エルシアンとアスファーンのギスギスピロークが読みたいというリクエストにお応えしたもの。すごいギスギスっぷり。「自由の翼」を読んでからのほうが楽しめるかもしれません。

鳥籠から出された小鳥は一瞬戸惑ったようだったが、すぐに自由を知って飛び立っていった。それを見つめる異母弟の眼差しに淡い憧れが浮いているのにはすぐに気付いた。或いはそれは翼を持たない者たちの、永遠の憧憬であるかもしれない。鳥になりたいのかと聞くと赤面して俯く様子が、まだ少年期の初端に連なる年齢に似合っていた。

その瞬間に胸にゆるく溶けてくる温かなものを、庇護欲といったのかもしれない。そんな言葉などよりも、この弟の為に手を差し伸べてやりたいと思ったことこそが真実なのだろう。弟の憧れの視線はまっすぐ自分に向けられている。お互いに不遇という言葉で環境をくれる王子であるが、自分が環境という名の頑強な檻に斧を振るように見えるのだろうか。

王太子となるべく自分が払ってきた努力も節制も他人にひけらかす気はないが、いつか弟がそれを理解してくれたらいいと唐突に思う。同母の兄弟を持たないせいか、自分を無条件に慕ってくる弟を決して嫌いではなかった。むしろこの弟の指針たり続けようと望むことが自分の中の公正と中庸と闘争心を高める作用なのかも知れない。そんなことを思えば自然と大人として振る舞うこともできた。

弟が再び空を見上げるのにつられ、空を見上げる。小鳥の影は何処にも無い。だが、その残像は目の奥にある気がした。

——飛び去る小鳥。自由に広げる、雄々しくも力強くもないがしっかりと飛ぶための、その翼。

逃げ去ることも闘うことも選べるのだと信じていた、それは遠い光景。

いつか風塵に帰すべき、淡い、薄い、何より重い記憶——

.....どこか遠くから揺すられるように、途切れ途切れの嗚咽が聞こえる。暗黒のように沈静していた意識が引きずられるように戻り、アスファーンは目を開けた。一瞬見覚えのない天蓋布に瞬きし、自分が誰の間にいるのかを思い出して薄暗く笑った。殊更ゆっくり身を起こし、微かに身じろぎする異母弟の背を丁寧に撫でる。喉で呟いた彼の反応に構わず、寧ろ宥めるように丁寧にそれ続けた。

「.....やめて.....」

やがて掠れた声が出た。アスファーンは背を緩やかに往復する手を止めて、曖昧な返事をした。自分の手を彼が振り払えないのは当然だ。無理矢理関係を持ってから既に四ヶ月が過ぎようとしているが、弟が必死で抵抗するのは変わらない。いちいち押さえ込むのも面倒になって、腹に一発くれて大人しくなったのを手首をまとめて結わえ、寝台の天蓋柱にくくりつけてある。終わった後で少しまどろみに溶けていたのだが、戒めはそのままだ。

もう一度、同じ声と同じ事を言った。アスファーンは小さく笑うと異母弟の背を半端に隠す黒髪を払いのけた。
「お前はいつまで経っても愛想がないな.....」

言いながらアスファーンは喉で笑った。自分の言い草が不意に可笑しくなってきたのだった。弟の悲鳴も懇願も、全てを自分の都合の良いように歪めて受け取るように振る舞う行為がこれほど容易く、且つ、自分に満足感を与えるものであると思ってもいなかったのだ。

弟の返答はない。が、彼が微かに身を震わせたのは分かった。新しい涙を堪えているのか気弱な怒りを抑えているのか、そのどちらでも構わなかった。アスファーンはゆるく笑いながら露わになっていた弟の隆起する肩胛骨の付け根に唇を押しあてて、強く噛んだ。息を呑む弟の反応は、最初の夜から同じだ。全身から滲み出る、拒否の空気。

「私は忍耐強い方だと思うが、エルシアン。あまり焦らされるとお前のことを憎しみたくなるよ」

エルシアンが枕に顔を押し付けたままでゆるく首を振ったのが分かった。アスファーンは長々とした溜息をついてみせ、寝台から降りて自分の衣服を拾った。流石に10月を過ぎると夜明け前には張り詰めるほど冷える。

適当に身支度を整える。アスファーンの暮らす宮からエルシアンの部屋までは中庭をよぎり、長い回廊を歩く。中庭以外は王族専用の通路を使うから誰かに会うことも姿を見られることも殆どないが、侍従や侍女達の世話の対象としての自分を無視することは出来ない。彼らの仕事は仕事として、きちんと務めさせるのがよい主人であろう。

風よけに羽織ってきた皮の外套に袖を通しながらアスファーンは寝台から離れ、渋く枯れた色のカーテンをそっとずらした。外はまだ暗い。夜明けは日を追って遅くなっている。そろそろ潮時であるといえた。

「また来るよ、私の愛しい恋人.....少しは泣きやんで、待っているくらいの殊勝なことを.....」

「兄、上」

アスファーンのことを、弱くはあったがエルシアンが遮った。アスファーンは優しく返事をした。関係を持って帰る朝にエルシアンが言うことなど知れていたが、言わせてやるのも彼の余裕というものであった。結局のところ、エルシアンはアスファーンとの関係を拒否できていないのが現実だからだ。

「こ、これ、ほどいて.....よ」

肘で身を支え起こしながらエルシアンが言った。アスファーンが少し眠っていた間にも必死でふりほどこうとしたのか、固い結び目の辺りの繊維がほつれている。口でどうにかしようとしたのだろう。その消え入りそうな声音にアスファーンは笑った。そのままにして帰るつもりはなかったのだが、時々エルシアンは勝手に罫に飛び乗る。自分で墓穴を広げているのだと分からないのは混乱しているせいだろうか。

「ほどいてもいいが.....次の約束が欲しいな」

「やく.....そく？」

「そうだよ。恋人同士なら次の約束をしてくれてもいいだろう？」

僅かな時間を置いて、エルシアンの顔に血の気が戻ってきた。何を言われているのかを理解したのだ。

「嫌だ！」

返答はまさしく反射といえた。アスファーンはそうかと軽く頷いた。

「だったら好きなだけそうしているんだな。お前が一体どんな言い訳をしたのかは、その内、噂になって流れてくるだろうよ」

素っ気ない言い方をすると、エルシアンが喉を詰まらせて喘いだ。異母弟は決してこの関係を誰にも告げないだろうという確信は最初からあったが、ここまで徹底していると可笑しさと共に僅かながら哀れさもこみ上げてくる。

それは思いがけず、自分の表情を柔らかくしていたようだった。エルシアンが自分を見上げて悔しさと現実とを天秤に掛ける、微妙な顔付きをした。これはいつもそうだとアスファーンは思う。理由を付けて楽な方へ流れ現実と妥協することをさほど重大に考えていないのだ。

——自分には耐えられないことでも、他人には違う。そう、自己は唯一であって誰も成り代わることは出来ないし、まして他人にもなれはしない。どんなに呼んでも欲しても届かないと知りつつも。

例えば、人が鳥にはなり得ぬように。脳裏を何かの羽音が掠める気配がした。

アスファーンは肩をすくめて大仰に溜息をついてみせた。エルシアンがその仕種で怯えるような目になった。

「お前はいつも何か要求するばかりで私の願いを聞いてくれたことなどないな……次の約束くらいはしてくれてもいいだろう？」

「い、つも……いつも……俺を好きにしてる……じゃないか」

「私はお前の口から愛が聞きたいんだよ——いつまで恥ずかしがるつもりだ、思わせぶりの女みたいな真似をする」

子供に笑うように穏やかな顔を作りながら、アスファーンは寝台に腰掛けて弟の前髪をかき回した。エルシアンがぐしゃりと顔を歪めてその手を振り払うように余所を向いた。ほんの僅かに肩が震えているのが分かる。傷付き、血を流しながら、それでも敵から逃げようとする弱い獣であるのが見えた。

それは多分、小鳥ほどにか弱い。アスファーンは胸に沸いた怒りを腹に静めるように深く呼吸した。

「……エルシアン」

低く呼ぶと異母弟は身体ごと硬直させてから、ゆっくり振り返った。殆ど変わらない色の瞳がかち合うと、弟の焦点に映る自分は酷く暗い目つきで笑っていた。一瞬の後にふっと目の前からそれが消えた。エルシアンが視線を外して俯いたのだ。唇を硬く結んでじっと枕の上を睨んでいる弟の肩を掴み、アスファーンは耳元で低く言った。

「あまり時間がない、どうするのか決めなさい——そんなに怖い顔をするな、愛しい弟よ……お前が勝手に部屋に入ると言うから次の予定を聞いてやっているのに」

エルシアンが首を振った。

「……お願いだから、もう、こんなこと、……」

「やめる気はない。愛している者を手に入れるために手段は選ばないと私は決めている」

エルシアンは何かを言いかけ、ゆるゆると首を振った。俯いてしまった首の角度のせいで、長い髪が表情を隠している。だが、そこにあるのがいつか遠い空の下でアスファーンが見た、何処までも明るく信頼に満ちた光でないことだけで十分だった。アスファーンはちらりと窓の方へ視線をやる。時間はやや迫っているように思われた。

「エルシアン……返事を焦らすのはお前の常套手段だろうが、私にも都合があつてな。あまり私を苛立たせても、お前にいいことはないと思うよ」

穏やかに口にしながらもそれは恫喝であった。エルシアンもそれは分かるらしく、じっと俯きながら兄上、と呟いた。それは普段聞いているどの声よりも低く、今まで聞いたどの悲鳴よりも苦痛が露わだった。

「……どうして、こんな……」

彼は何千回も自問自答しているのだろうとアスファーンは思った。アスファーンの側だけに完全なる非があるのではなく、自分にも何か落ち度があったのではないかと考えているのだ。それは間違いではなかったが、反面、何度繰り返して検証しても答えが見いだせないところにこそ、エルシアンの無自覚さ——これを誉め言葉にするならば天真爛漫さ——の深い病がある。病んでいるのは自分だけではない。自分は知りすぎ、これは知らなすぎるのだ。

何故と聞かれたときの返答なら決まっていた。聞かれた回数と同じだけ繰り返してきた言葉をアスファーンは淡々と

答えた。

「愛していると何度言えば信じて貰えるのだろうか」

言ってからアスファーンは苦笑した。同じ事を聞くエルシアンもその度に同じ事を言う自分も、揃って飽きないものだったからだ。その笑みを何と思ったのか、エルシアンは苦痛と懇願の涙で若干腫れた瞼を伏せた。睫に微か、水滴が戻ってきているのが見える。アスファーンは何故か笑みが自分の頬に浮いてきたのを唐突に自覚した。

「泣くな、あまり私を困らせるな。——ああ、本当に時間だ」

アスファーンはエルシアンの手首を硬く縛る飾り帯の結び目を掴んでぐいと引き寄せた。勢いでエルシアンが体勢を崩し、寝台の上を僅かに引きずられた摩擦に顔を歪めた。

「さ、次の約束を。いつがいい？」

エルシアンは黙って首を振る。頑なではあるが断固とした拒否の言葉を吐かない逃げの姿勢が苛立ちを煽った。エルシアン、と強く促しても返答はない。分かった、とアスファーンは寝台から立ち上がった。

「では、お前の恋人に関する派手な噂を待つことにしよう」

ぴしゃりと言い捨てて背を返すと、後ろから兄上という切迫した声がした。振り返るとエルシアンは今にも崩れそうな表情で、じっとアスファーンを見つめていた。薄暗い灯りの中でもはっきり分かるほどに青ざめた顔色が、結局の結論を教えてくれた。

「……つ、次……は、……来週の末が、学院が、休みなので……」

呻くような声音が、身体ごと震えていた。アスファーンは頷き、再び寝台の側まで歩み寄った。寝台の上にべたりと座り込むように身体を立て直したエルシアンが、黙って手首の戒めをアスファーンの前に差し出した。アスファーンはそれに手をかけ、そしてうなだれている弟の顎に指をかけて上向かせた。

「来週末がいいんだな……聞かれたことには答えなさい」

「……はい」

そう頷いた途端、エルシアンが耐えられないというように目を閉じた。涙が今までの轍を拾うようにして流れていった。アスファーンは軽く相槌を打ち、自分が結んだそれを丁寧にほどいた。エルシアンが散々暴れたせいで、帯が巻かれていた部分は赤くなっている。そこを指で撫でると痛むのか、顔をしかめた。

「……骨はどうにもなっていないようだな。袖から見えないとは思うが、気になるなら腕輪でもはめておきなさい」

エルシアンは再び頷いた。アスファーンは少し笑ってエルシアンの頬を両手で挟み、まだ水気の残る涙の痕へ唇を押しあてた。

「では、また来週。楽しみにしているよ……」

囁くと、エルシアンが声を立てずに泣き出すのが分かった。

王族専用の通路を夜に行く者は殆どいない。元はやはり万一の際の秘密の通路として張り巡らされたものであるらしいが、シタルキアの王都がザクリアに定まり王城が完成してから200年以上を経過すると理由などはどこかへ消える。今は王族が人目を気にせずに後宮を行き来するための道具であった。一度だけ異母兄とすれ違ったことがあるが、この兄はウォーガルドと違って自分に敵意を抱いていない。簡単にお互いの目礼だけで通り過ぎることで流していた。

エルシアンは部屋近くで回廊から抜ける。巡回の時間は知っているから誰かに見咎められることは考慮しなくて良かったし、エルシアンは部屋に入るところを見られたからといって、自分が窮地に立たされることなどあり得なかった。

居間に入っていくと、書斎の方に灯りが見えた。エルシアンはまだ眠っていないのだろう。学院の成績は急落していると聞いている。後宮内にある王族の学問所ではなく、王立とはいえ市井の民の混じる中央学院への進学をエルシアンが願ったときに後見したのが既に王太子となっていた自分であった関係で、エルシアンは成績の事は定期的に知らせを受けていた。いざとなれば成績の下降を理由に学院を退学させて王太子府の仕事に就かせてもいいし、逆に退学をちらつかせてエルシアンは譲歩を更に引き出してもいい。どちらでも自分の好きに出来る状況といえる。そしてエルシアンも退学することは既に分かっているのだろう。必死で取り返そうとしているのに違いなかった。

ただ、とアスファーンはゆるく笑う。アスファーンは既にエルシアンに自らの片腕となり国政を導く役割を担わせる将来を想定していない。エルシアンがいるべきは、自分の従順な恋人という位置だ。愛するためでなく、苦しめるための。その結果が破綻であることは分かっているが、恐らく破滅していくのはエルシアンの方だろう。こういう場合、自己をどれだけ強く持っているかで全てが決まる。

書斎に入っていくとエルシアンはいなかった。机の上には書きかけのノートや資料が散乱している。インク瓶の蓋も開いたままだから、書庫だろう。学院の講義で作っているノートをまとめなおしているようだが、一目見ただけで、まるで進んでいないのが分かった。彼の脳裏を占めているのが酷く混濁した惑乱であることを証明するように、ノートの脇の付箋には切れ切れの単語が並んでいる。

兄、何故、約束、違う、違う、駄目だ、父、欠点、成績――

アスファーンは小さく笑った。ラジールとの戦線がようやく終着し、父は来週にでも王都に帰還する。既に式典や夜会などの段取りはほぼ終わっており、あとはその姿を迎えるだけに近かった。いつだったかエルシアンが父にこの関係を訴えると叫んだことがあったが、その心配をアスファーンはしていない。エルシアンは下手な脅迫に泰然と構えてみればそれで済んだ。

エルシアンは混乱は分かりやすかった。アスファーンは強い態度にどうしていいのかわからないのだろう。自分なら、とアスファーンは再び唇をゆるめた。そもそも無防備に相手を信頼するかどうかという性質上の問題を差し引いて同じ目に遭ったとしても、エルシアンと同様にはならない。どんな事があっても自分を不当に傷つけ、侮辱した者を許さない。同じ事をして返すか相手を滅多切りに切り刻むかのどちらかであろう。そしてエルシアンに足りないのはその覚悟、自分で自分の中にある憎しみと向き合うだけの性根なのかも知れなかった。

アスファーンは自分でも良く分からない吐息を落としてエルシアンのノートの乱雑な走り書きを指でなぞった。彼の混乱をなぞることで、何かが得られるものでもない分かっているのだが。

あ、という声がしてアスファーンは振り返った。書庫から戻ってきたエルシアンの顔が薄暗い中でも急に青ざめているのが分かった。一瞬目があって、エルシアンは鮮やかに身を翻した。凄まじい勢いで書庫の扉を閉め、中へ閉じこもってしまった弟にアスファーンは苦笑する。何故彼は目先のことしか考えられないのだろう。書庫の鍵は部屋の鍵と共通なのだ。

「……エルシアン」

扉をゆっくり叩くと、奥から帰れ、という押し殺した声だけが返った。僅かに混じった語尾の震えで、弟が恐怖と混乱のあまりに涙を浮かべているだろう事が分かる。アスファーンはこぼれてきた笑みを口元に拭い、エルシアン、と優しい声を出した。

「いつまでもそこにいるわけにもいかないだろう？今夜は話があって来たのだから、お前の嫌がることはしないよ」

「.....嘘だ.....兄上は、いつも嘘ばかり言うから.....」

エルシアンは扉のすぐ側にいるのだろう。声の位置が低い。座り込んでしまっているのかも知れなかった。アスファーンはそれに合わせるように書斎の絨毯に膝をつき、扉越しに穏やかに話しかけた。

「嘘？ 嘘をつくのはお前の方だろう？ この前の約束も平気で反故にして.....」

予測はしていたから、適当な口実を作って近侍に様子を見に行かせてもいるのだが。戻ってきた近侍の返答は思った通りにお部屋にはおいでにならない、だった。どこにいたのかは詮索するべくもない。皇太后のところだろう。届けは出ていなかったが、居座ってしまえば皇太后もむげに追い返すほどエルシアンに厳しくはなかった。

エルシアンが扉の向こうで沈黙し、やがて嗚咽が零れてきた。これ以上は話しても無駄だとアスファーンは確信し、持っていた鍵で扉を開けた。エルシアンは果たしてその場に座り込んでいた。アスファーンの姿にはっとし、一瞬愕然という顔をしたが、鍵のことにはすぐ思い至ったらしい。更に顔を歪めてよろよろ立ち上がろうとした。

アスファーンは難なくその腕を捕らえた。エルシアンが涙で掠れる声で、許して、と呟くのが聞こえた。引き寄せようとするアスファーンに反抗して、その腕が自分をやわらかく押し返そうとしたが、それは弱い抵抗だった。半ば引きずられるようにして、エルシアンを胸に納めて抱きすくめると、彼の全身が張り詰めたように緊張するのが分かった。

「私がこんなにお前を愛しているというのに、お前は本当に性悪な真似ばかり覚えていくのだな」

「ゆ.....許して.....」

呻く声さえ震えている。アスファーンは薄く笑いながらエルシアンの髪を撫で、宥めるように背を撫でた。

「約束したのを無視されて私がどれだけ悲しかったか、お前は分かっている.....人の心を玩ぶのがどれだけ罪か分からないのか」

そう囁くと、耳朶に掛かるアスファーンの呼吸から逃れるようにエルシアンが身をよじった。暴れる事もできないほど、全身が竦み上がっているようだった。弟が座り込んでしまうのに合わせて床へ膝をつく、アスファーンは身体を離れた。崩れるようにその場にうずくまるエルシアンの髪をかきあげ、アスファーンは普段は見えない首の付け根にきつくキスをした。赤い痕跡がぼつりと残った。

「.....エルシアン」

呼ぶと、異母弟はぎこちなく顔を上げた。表情の中をせわしく揺れる恐怖と混乱と、苦痛から逃れるための必死の思考、それからアスファーンの真意を探る目。最後のそれがひどく神経を逆撫ですることを、多分彼は知らない。被害者なのだと声高に主張するその瞳が、どれだけ自分の罪に対して無自覚で無神経なのか、これは本当に分かっているのだ。

アスファーンは胸内で吐息を落とした。今自分を支配しているこの強烈な感情が愛であろうと憎しみであろうと、どちらでも構わない。自分を傷つけ、裏切るものは絶対に許さない。その手段がどうであろうと、必ず勝ち残り、生き残って自分の望む結果を手に入れてみせる。それが自分の中に根強く立ちおおせる芯である限り、エルシアンとは相容れないのかもしれない。

兄上、と細い声が言った。アスファーンは視線を弟にやった。エルシアンの涙は既に止まりかけていたが、庇護を訴えてくる目つきだけは変わっていなかった。その弱々しさ。いつか弟が離してやった小鳥よりも遙かに力弱く、繊細で、他人から傷つけられては生きていけないのだと主張する目を見る度に、強い強い何かが腹の底から駆け上がってくる。

昔、それを庇護欲であると名付けていた。例えば二人で小鳥を逃がしてやったときのことを思い返せば、そこにあるのは年齢の離れた弟を愛しむ気持ち、こちらを見つめる憧憬の視線を大らかに受け止めていた自分の残像だ。これを可愛いと思った、手を伸べてやろうと思った、それは確かに間違いではなかった。

だが、もうそれはやってこない。過去を懐かしむ気持ちはアスファーンの中にもあるが、取り戻したいとは既に思えなかった。全ては、エルシアンのために。喜びも悲しみも、憎しみでさえ全てを還元すべきは、愛しくて殺してしまいたいほど憎い異母弟の、為に。

アスファーンが黙っているのに怯えたのか、エルシアンは呼びかけただけで視線を伏せてしまった。苦笑しながらアスファーンはエルシアンの頬を愛撫した。

「こんなに遅くまで勉強とは熱心なことだ。明日の午後は空いているから、私が見てやろうか」

アスファーンとて後宮内の学問所で一通りのことは学んでいる。実務に入ってから学問的な探求の方向からは離れてしまっているが、それでも自分で習得した知識は脳裏にまだ残っていた。

エルシアンは殆ど反射的に首を振った。アスファーンはあっさり引き下がった。明日の午後は半月ぶりの休養となるはずだったから、あまり言い張ることでもなかった。忙しいのは事実だ。今は特に父王がラジールとの交戦の為に戦地に赴いているために、アスファーンに掛かる事項も多い。

「私も忙しくてお前に滅多に会いに来れないのだから、せめてもう少し歓待してくれてもいいだろうに……約束をしても無駄だということは分かったから、ならば今まで通りに私の都合のいいときに会いに来ることにするよ」

アスファーンが言うと、エルシアンが顔を強張らせて首を振った。お願いだからやめて下さいという言葉が小さく零れた。アスファーンはエルシアンの頬を両手で挟んで上向けさせた。ほの暗い灯りの中で、弟の睫にかかる水滴だけが鈍く光っている。

「約束してもお前は平気で破るし嘘をつくからな……だから仕方がないだろう？」

「……や、くそくだって……俺が、したくて、そうした訳じゃ……」

「どちらがいいのか聞いたときに選んだのはお前だよ」

「それはあんたが脅したから……！」

「何でも他人のせいに出るとは、都合のいい口だな」

言うなりぴしゃりとアスファーンはエルシアンの頬を叩いた。大して力を込めたわけでもなかったが、エルシアンの瞳に溜まっていた涙が勢いでこぼれたのが分かった。アスファーンはエルシアンの肩をさすりながら囁いた。

「……お前が私に本心から詫びて次の約束を出来るというなら、私はこの前のことを許してやるつもりがあるが……どうする、エルシアン」

エルシアンは首を振り、そして急に顔を上げてアスファーンに怒鳴った。

「俺は嫌だって、嫌だって何度言えば、何度言えば気が済むんです！　俺は、兄上のことをずっと尊敬してましたし、今でもそうしたい！　あなたがどうしてこんなことを続けているのか知らないが、馬鹿げてる、正気じゃない！」

肩を抱くアスファーンの腕を突き飛ばし、エルシアンは混乱し掛ける自分を押さえるようにこめかみに手をやった。

「正気？　恋にまともも正気もあるものか。お前の言葉を借りるなら、そうか、私はでは気が狂うほどお前を愛しているということになるな——お前も時々はいいいことを言う」

感心したように頷いてみせるとエルシアンが慌てたように首を振った。

「そ、そういう意味じゃなくて！」

「ではどういう意味だ？　お前の言うことは訳が分からない」

「だから、俺は……俺に悪いところがあるなら直します、兄上の気に入って貰えるように努力します、だから、こ、こんなこと、もう、嫌だって」

エルシアンが必死で言い募るのを無視してアスファーンは弟の襟元へ手を伸ばした。はっとしたようにエルシアンはそこを自分の手で押さえ、僅かににじり逃げた。

「努力する必要はない、お前はお前のままで私は十分だよ——直すというならもう少し素直になってくれたらいいのだがな。お前がもっと従順になれば私は手荒い真似はしないのに」

言いながらアスファーンはエルシアンが握りしめる襟の袷をその手ごと掴み、もう片方の腕を腰に回して引き寄せた。重心が変わってエルシアンが均衡を崩し、がくと頭が落ちる。襟を掴んでいたせいでその細い首が一瞬しなり、苦しげに呻いた。

「けれどエルシアン、私は少し苛立っている、分かるだろう？　お前は私に気に入って貰えるようにするといいながら、いつまで経っても素直にならない。平気で嘘をつく——そうだな？」

体勢を立て直そうともがいている弟の襟首を揺すると、苦しさのあまりかエルシアンは手をアスファーンの胸元へやり、服を掴んだ。起きあがろうとして半ば縋り付くような格好に、アスファーンは小さく笑ってその背を抱き寄せる。ようやく身を起こしたエルシアンが肩で呼吸をしているのに構わず、アスファーンはそうだな、と強く繰り返した。

エルシアンは軽く咳をしながらアスファーンを見つめた。返答をしないのは、どう転んでも新しい言質になるのを怖れているからだろうか。返事、と叱りつけるように言うと、一瞬痙攣するように震えてから首を振った。

「ゆ——許して、許して下さい……」

それが望んでいる返答でなかったことで、アスファーンは躊躇わず手をあげた。平手で打つのはそれでも跡が残らないからだ。派手な音と共に、エルシアンが床に崩れた。結局彼には直接の折檻がよく効くのだった。

「約束を放り出して置いて、ゆるしてだけで済むと本当に思っているのか、お前は？ 馬鹿か？ もっと言うべき事があるだろう」

床から半身を起こしたエルシアンが、ばらけた髪の間から彼を見つめた。唇は半ば開いたまま、固まっている。何を求められているのか分かっていながら、最初の一言が出ない時の、弟のいつもの癖だった。アスファーンはもう一度手をうち下ろした。勢いでエルシアンが床に側頭を打った。

「言うべきことはまだあるだろう。分からないなら——」

「待って！ ……待って、下さい……」

手を三度あげようとしたアスファーンの腕にしがみつくようにしてエルシアンが遮った。じりじりした沈黙をやがて破ったのは、細く消え入りそうな声だった。

「……もう、しない、から……」

「何を？」

「や、約束を、破ることは、もうしないから……乱暴は、それだけは、お願いだから、やめて……」

うなだれたままの呟きは、ひどく掠れていた。顔を上げないのは、きっとアスファーンを見ることさえ出来ないほど、怯えているからだろう。アスファーンはその返答に微笑み、いいとも、と優しい声を出した。

「お前がそうやって最初から素直に振る舞えば、私だって手酷いことはしないよ。だがエルシアン、まだ少し配慮が足りないな。こんな時は乱暴をしないでというよりは、優しくして欲しいという方が私の好みだが」

エルシアンが俯いたまま震えだしたのが分かった。それを言えばどうなるのか考えるまでもないことであつた。黙ったまま流れた時間にいい加減飽きた頃、アスファーンは弟の名を愛でるほどに暖かく呼んだ。

「お前に優しくするのも手荒にするのも、お前の態度一つだということを忘れてはいけない。お前が大人しく私に従うなら、私はお前を大事にしてやろうと言っているのに」

返答はない。アスファーンは微笑みながらエルシアンの顎をつまんであげさせ、目があつた瞬間にもう一度軽く頬を叩いた。ごくんとエルシアンが喉を鳴らした。見る見るうちに彼の瞳に涙が溢れてくる。

「や、優し、く……——」

言いかけたところで込み上がってきた呼吸に押し切られるように語尾が消えた。アスファーンはゆったりと笑いながら、今自分が打ち据えた箇所をいたわるように撫でた。

「いい子だ、もう泣くな。さあ、立って……寝台まで歩いていけるね？ ああ、いい子だ、もう泣かなくていいと言っているだろう……」

エルシアンは僅かに頷いたようであつた。おぼつかない足取りで寝台まで辿り着き、振り返ったとき、その顔に浮いていたのは見慣れた懇願だった。アスファーンは黙って首を振る。エルシアンは寝台の脇に棒のようにつき立ったまま、無言で俯いた。

アスファーンは寝台の上に押しやるように彼を突き飛ばし、上着を剥ぎ取った。エルシアンはうつぶせのまま、じっと目を閉じて息を殺している。それは全てを堪えるときの呼吸であつた。

背の一点に、ぼつんと赤いものが目に入った。先の逢瀬の時にアスファーンがつけた噛み傷の跡だろう。既に傷は治っているが、まだ赤みが残っている。

同じ場所にアスファーンは唇をあてた。この場所から皮膚を噛みちぎってみれば中が見えるだろうか。赤く湧き出る血液と絡みつく肉片の中に、折り畳まれた翼があるだろうか。――自由へ飛んでいくために、異母弟が心底欲しがっているものが。

そんなものがあるはずはない。自由を飛ぶ翼など、何であれ持っていないのだ。あの小鳥だって、愛玩動物だから自由となっては生きていけないはずだったのに、何故それを言わなかったのだろう。小鳥を虜囚から解き放つことにかけた弟の夢を笑えなかったのは何故。

人に翼はなく、飛び立つための空もない。境遇や運命などは甘受するためではなく、荒唐無稽な夢に逃避するためでもなく、克服するためにあるのだ。逃げるためではない。断じて。翼なき群衆に混じる奇跡がこの弟という人の形であることは認めない。奇跡の具現である翼の有無をいつか、この手で引きずり出してみせる。

アスファーンはそれを証明するためだけにこの背を切り裂いてしまいたい衝動を、宥めながら、吟味しながら、いつものようにエルシアンを愛し始めた。

エルシアンが父にラストレアへの転校を申し出たのはここから7週間後のことである。

書類を作り終えて父の最終的な決済のために、アスファーンは自ら執務室を訪れた。父の執務室は禁園の庭を望んでいる。窓の下に赤い寒椿の群れが燃えているように一瞬見えた。

入寮の手続きに関する終了証明や転校手続きなどは単なる事務だが、王族の居住場所を移すとなると王の正式な署名が必要であった。転校という選択肢を全く想定していなかったのは自分の落ち度といえた。だからそのことは仕方があるまい。だが、このままにしておくつもりも毛頭なかった。エルシアンは自分の裏を搔いた快感に上機嫌極まりなかったが、愛玩物であった小鳥が、全てを自分の思うようには出来るものとアスファーンはたかを括っている。父が転校を許したのは意外でもあったが、父はエルシアンを、見ていないようで見ている。いつでも視界の隅にいるときは、細心の注意を払っていることを既にアスファーンは知っていた。

エルシアンの転校と転居についての一通りを説明すると、父王は黙ったままで書面に名と国号を書き入れた。これで全ては決定となった。書類の返却を受けながらアスファーンは父上、と言った。

「……エルシアンは王都にいるべきだと、再三申し上げておりますが」

——将来に渡って自分を補佐すべき弟たちの選定に掛かる事項であり、エルシアンを育成するつもりがあるからこそ今まで目をかけてきたつもりですのに、今私の手元から離せば意志の疎通がひどく難しくなります……

父が了承した旨をエルシアンに告げて後も、アスファーンは数度その件を上奏し、ことごとく下げられてきた。今度も同じであろうと分かっているながらも口にするのは、いつか呼び戻すための布石でもある。以前からアスファーンがエルシアンを手元に置きたがっていたということは、父と、父の秘書たちの記憶に必ず残る。何か正当に見える理由を得たときに、意志を通しやすくなるであろう。

父は軽く首を振り、立ち上がった。ついてこいと手振りで示し、先に行く。追って歩いた先は禁園であった。北風は肌を切るように厳しいが、王の許可した者以外は立ち入りを厳しく禁じられている庭園に、人影は勿論ない。椿の集落を遠く目に映しながら、父と二人で散策するためにこの場にいるのではないことは分かっていた。

「アスファーンよ」

父が呟いた。

「あれのことは放置しろと以前にも言ったな」

「父上、私は彼を見込んでいます」

父はちらりとアスファーンを振り返り、表情を殆ど変えぬまま、ならぬ、と言った。

「構うなと何度言えば分かる。ウォーガルドもお前も、あれに構い過ぎる」

アスファーンは苦笑に似た表情を辛うじて作った。

「それは、あれの母のことで——」

言いかけたとき、父王が黙れ、と一喝した。アスファーンは続けようとした言葉を飲み込んだ。長い沈黙が不機嫌に通り過ぎていく最中、鳥の羽音がした。アスファーンはついそれを目で探した。遠い空に翼を広げる小鳥の影に瞳を細めていると、父が溜息をもらしたのが聞こえた。

「……あれはこの城を出て行きたがっていた。昔から、まだ子供の頃からずっとだ。だからそれでよい。いずれ、折を見て臣籍降下を行う故、その積もりでいるように」

アスファーンは黙って目礼し、そして呟いた。

「父上は、あれを一番目に掛けておられる……それこそ何にも代え難く、誰よりも」

「黙れ、アスファーン。あれのことに口出しは無用だと何度言えばいい」

「——たまには名で呼んだら如何です？ エルシアン、と」

父は微かに怒ったように視線を強め、アスファーンを睨んだ。アスファーンはそれを見返した。再び小鳥の声がするまでの長い一瞬を、アスファーンは父と睨み合って過ごした。

「余計なことだ」

低い声には紛れもなく深い怒りが込められている。アスファーンはいえ、とゆるく首を振った。何故か、底意地の悪い笑みがこぼれてくる。

「エルシアンというのが父上の中では真実の名でないからですか？ 勝手に官吏のつけた名など、どうでもいいと思われている？ ……あれは母によく似ている。その母と似た名で御心に呼ばれているのではないのですか」

父王は返答をしなかった。沈黙のまま、禁園を横切っていく。やがて休憩用の温室が見えてきて王は足を止め、振り返らずに言った。

「アスファーン」

「は」

「満足か」

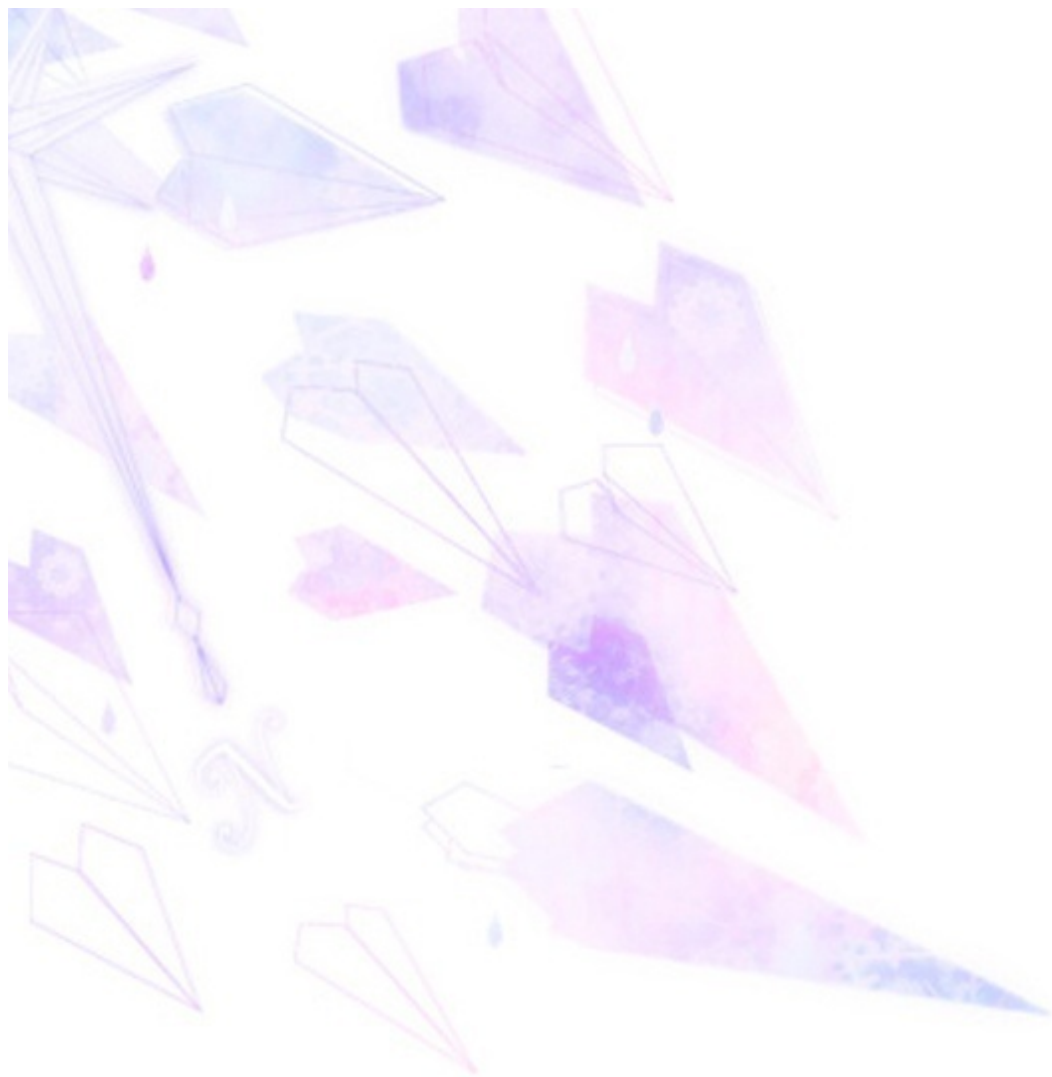
聞かれた内容が把握できずにアスファーンは眉を寄せた。ちらりと王は振り返り、満足か、と繰り返した。父上、と怪訝に聞き返すと、王はようやく薄い笑みを浮かべた。

「——お前を哀れんでいる、という意味だ」

アスファーンは顔を歪めた。王は温室の扉に手をかけて、半刻したら呼びに來いと言い残して中に消えた。孤独であることは王の宿命でもあり、周囲に理解を求めて回らない父の性質でもあった。

一人で元來た道に戻りながら、自分たちに性質の近似を見出してアスファーンは苦笑しようとしたが、上手く笑うことが出来なかった。

【翼在る場所 了】



蟹と奥様

O.D.216 - Musshal
Elthane - Kalshena

エルシアンとカーシャが結婚して長女が産まれた頃。皇帝戦記で蟹の短編を書けというリクエストにお応えして書いたのがこれ。オチはこれしかない気がします……エルシアンの人生の中で一番「普通の幸せ」を噛みしめてられた頃じゃないかな。この後カーシャの死、ハイフォンの受難と続いていくので、その直前のほんのりした最後の時代です。

鉄がぱちんと殻を割った。先の曲がった鉄串を細い脚の甲羅に突っ込んで、エルシアンはひたすら中の蟹肉を掻き出している。食卓に今は殆ど会話がな。カーシャは俯いて自分の前に次第に山になっていく蟹肉をフォークでつつき崩すことしかしていないし、エルシアンは蟹を剥くことに熱中している。そもそも蟹を食する時には人は極端に無口になるが、手を伸ばせば届く距離に向かい合いって座りながら、二人の間には重い霧が掛かっているようであった。

やがて最後の脚を処理し終え、エルシアンが顔を上げた。それに釣られたようにカーシャも同じようにし、視線があって二人はじっとお互いを見る。殆どにらみ合うような緊張感が夫婦の間を一瞬流れ、そしてエルシアンの溜息がそれを破った。

「……だから。食べ物の嫌いは駄目だって何度言ったら分かるんだよ。剥き方が分からないっていうのはもう通用しないからな」

妻のその言い逃れを回避する為だけに小半時もかけて黙々延々蟹を剥いた自分を一瞬馬鹿じゃないだろうかと思エルシアンは思うが、それよりもカーシャの偏食のほうが重要な問題だとすぐに思い直した。

さあ食べると開き直られて、カーシャは既に涙目に近い。が、エルシアンの方にも言い分はきちんとあって、出産が済んでまだ2ヶ月ほどであるというのに彼女は以前と変わらず絶句するほど食べない。肉と脂の濃いものは頑として口に入れず、魚も白身で背の柔らかい部分をつまむだけだ。彼女が難産で苦しみ、命の危険まで告げられたことをエルシアンは決して甘くは考えていない。とにかく体力からであり、体力の為には食べさせることだという周囲の意見に全面服従している。彼女は次は男子が産みたいと言っているが、今の状態では考えるだけでも恐ろしかった。

「私、本当に、蟹は駄目なんです……」

消え入りそうな細い声にエルシアンは僅かに哀れみを覚えるが、こんなことではいけないと気力を立て直して渋面を作った。

「……蟹、嫌い？」

声が若干押し殺されているのは、蟹を剥く労力の無駄を思うと気が遠くなりそうだからだ。剥けないと言われて意地になって全部ほぐしてやったのに、それを要らないと言われると流石に脱力が投げやりな怒りになる。エルシアンは既に自分の分は口に終えている。ここのところ殆ど毎日のように費やされる長い夕食の時間の7割は、妻との戦いなのであった。

「蟹、だけでなく、海老とかも……あの、甲羅のあるのは全部……」

甲殻類は全て嫌だと言われ、エルシアンは長い溜息になって椅子に深く座り直した。

「……君って人は、肉も駄目、卵も駄目、小魚も海草も雑穀も芋類も駄目、駄目、駄目駄目づくしで一体何だったら食べるんだよ」

「や、野菜とかだったら、少し……」

「だーかーら！ 少しじゃなく食べられるのは何かって聞いてるんだけど？」

「え？ えーと……蜂蜜……？」

エルシアンはがっくり肩を落とす。栄養という一面において悪くはないのだろうが、それだけ食べさせる訳にもいくまい。それに恐らく蜂の巣などは食べないだろう。

夫が心底から落胆したことをすまなそうにカーシャは俯いている。叱られてしゅんとしている様子が可愛いことは確かだが、これで甘い顔をするといつもと同じだからエルシアンは尚更苦い顔をして見せた。今でなくてもいずれ、娘のしつけも始まる。好き嫌いはなく何でも食べなさいと言う側の母親が極端な偏食というのは良くない。どう考えてもいいはずがない。

娘より先に妻の睨ということであった。

「君がその蟹を食べ終わるまで、待ってるから」

若干まだ蟹臭い指を舐めつつ、エルシアンは椅子に座り直す。カーシャは硬い表情でじっと下を向いていたが、やが

てフォークをおいて微かに泣き始めた。彼女の愁声が、細く空気を震わせている。反射的にもういいよと言いかけて、エルシアンはそれをどうにか飲み込んだ。

今なら分かる。手に取るように分かる。——彼女は実家でもこの手で乗り切ってきたに違いない！　まるで光景が目に見えるようだ。エルシアンは思った。彼女の実家は軍閥の筆頭格である武門の名家で、兄3人の下に若干年齢の離れた妹として彼女は生まれた。父親と兄たちが総じて甘やかしたに決まっているのだ。

18年をかけて熟成された天然で悪気の欠片もない、それ故に厄介な我が儘をどうしていくべきか、エルシアンも困惑気味だ。だが、ここで彼女の涙に負けてしまったら自分も彼女の家族と同じようになってしまおうと言い聞かせ、エルシアンは殊更表情を厳しくした。そうして暫く、元のような重い無言が続く。しかつめらしい顔でそれに向き合うのに疲れた頃、エルシアンは長い溜息になった。

「.....俺は別に君に今の2倍食べろって言ってるんじゃないんだよ。そんなことじゃ体にも良くないだろう？」

「それは、そうなんですけど.....でも、蟹とか海老とかは駄目なんです.....」

「君は大体なんだって駄目なんじゃないか」

カーシャは反論に唇を尖らせる。嫌いなものは絶対にイヤ、という頑なさは啜り泣いていた時と殆ど変わらない。強情というなら確かだし、頑固というなら当たっているだろう。エルシアンは次第に疲労が苛立ちに変わっていくと感じながらゆるく首を振った。

「俺は君の身体のことを心配してるんだ。そんなんじゃいつまで経っても全然回復しないんだからな」

自覚する程度にきつく、投げやりな言葉に妻はすと青ざめた。エルシアンは自分の語調の荒さを一瞬悔やみ、慌てて宥めるような声を出そうとした。が、それよりも妻が口を開く方が早い。

「そうですね、だって、そうしないと浮気されますから！」

「うッ」

全く虚をつかれた格好でエルシアンは返答に詰まった。それは彼女の出産が近くなってきた夏過ぎのことで、欲求に耐えかねてこっそり遊女を呼んだのが何故かすぐに彼女に知れ、その後は絵に描いたような夫婦喧嘩になった事件の当てこすりである。産後の様子を見るためだからと未だに寝室が別である現実、彼女の口からそんな非難が出るのだった。その下心が全くないとは言わないが、それだけでは勿論ない。エルシアンは怯みからすぐに回復すると、カーシャ、と厳しい声を出した。

「それは散々謝っただろ。あんなに謝って謝って、まだ足りないのかよ」

「足りるとか足りないとか、そんなことを言ってるんじゃなくて、エル様の誠意の問題だって申し上げてるんですっ」

誠意という言葉は実にこの場合耳に痛い。エルシアンは先ほどよりも強く気圧される。平謝りでどうにか王都の皇太后やら妻の実家やらへのご注進だけは勘弁して貰ったのだが、今でもこれはどうにも分が悪いことの一つであった。

「そ、それとこれとは今は全然別の話だろ！」

蒸し返されて思わず怒鳴ってしまってから、エルシアンは自分で首を縮めた。彼女に声を荒げることは自分でも滅多にないことだった。カーシャは一瞬目を大きく見開き、そしてぱっと赤くなった。泣き出すのだろうか。エルシアンは慌てるが、涙はない。怒っているのだ。

「食べられないものは、食べられないんです。蟹はいや。嫌い。絶対にイヤです」

彼女にしては低い声で、重く語られた言葉にエルシアンは長い吐息を落としてカーシャ、と言った。

「蟹、美味しいから、一口だけでも.....」

「じゃあエル様にそれ、差し上げますわ」

自分の労力という点を全く無視されて、エルシアンは腐りながら怒鳴る。

「これは君の為に剥いたものだから絶対に俺は食べないからな！」

「だって本当に嫌いなんだもの！」

「嫌いなものが多すぎて本当に嫌いかどうか俺には全っ然分かりません！」

「蟹は本当にイヤなの！」

「蟹、美味しいね最高だね！」

「——エル様は私と、蟹と、どっちがお好きなんですか！」

一瞬エルシアンはぽかんとした。その訳の分からない質問はなんだろう。ただし、それが彼の言葉に従順に頷くものでないことは明白である。と、いうことが分かった瞬間、かあとなった自覚はあった。

「——蟹！」

怒り半分苛立ち半分にエルシアンは怒鳴り、席を立った。大っ嫌い、と叫ぶ妻のかんしゃくを背後に聞き流し、足早に自室に帰る。昨晚飲みかけておいてあった酒瓶を掴んで中味を口に放り込み、早々に毛布を被って目を閉じた。腹が立つ時は、これに限る。

寝室の扉が閉まった音でエルシアンは目を覚ました。ぼんやりしながら体を起こすと小間使いがおはようございますと頭を下げる。ちらっと窓を見れば、外はもう明るい。昨晚はそのまま眠ってしまったようだった。差し出される湯で顔を洗ってひげをあたり、身支度を整える間、エルシアンは多少の気の重さを溜息にして流した。

昨夜の夕食の時、流石に言い過ぎた部分もあったことを理解しない訳ではない。ただ、カーシャの身体のこととはやはり心配でもあるし、彼女の偏食について考えを改める気は全くない。甲殻類は全部駄目だと言っていたからそれには今後配慮するとしても、やはり野菜と蜂蜜だけという食卓には怖気を覚えるのだった。

感情的になりすぎた部分はやはり、謝らねばなるまい。あちらだって悪くない訳ではないが、こんな時は最初に謝った方がいいのだとエルシアンは既に知っている。

食堂の扉を押すと、まずファイエが微笑んで会釈した。ファイエは妻の侍女だ。実家にいた頃から親しかったらしく、結婚する際にもカーシャが連れてきたのである。

「おはようございます、公」

いつものような挨拶にいつものように頷いて、エルシアンは彼の席に着いた。カーシャはまだ来ていないようだ。彼女が朝に遅れることは滅多にないことで、昨晚の喧嘩のことをまだ怒っているのだろうかとエルシアンはやや不安になり、側のファイエになあ、と話しかけた。

「カーシャはまだ、寝室に？」

だがファイエは怪訝な顔をした。何か変なことでも言ったのだろうかという意思表示であるならこれは長期戦の構えといえよう。いけない思いながらも次第に不機嫌になってくる胸の作用をエルシアンは押し殺そうとした。妻の偏食は確かに今に始まったことではない。結婚する前にシエルナ本邸に挨拶に行ったとき、今から考えるならば確かにカーシャだけが家族とは別のものを食べていた……気がする。それを自分が直してやるのだという自負があるならば、やはりここは退く気がないことを教えるべきだろうとエルシアンは妻の侍女に向き直った。

「ちゃんと出てくるようにカーシャに言っておいで。君が来るまでずっとここで待ってるから、と」

「あのう……」

エルシアンの言葉にファイエはひどく言い辛そうに目を伏せ、おずおずと切り出した。

「奥様はそこに……あの、さっきから……」

ファイエが滑らせる視線をそのまま追って、エルシアンは食卓の上にそれを見つけた。

先ほどから何故そんなものがぽつんと食卓に置いてあるのか、目には入っていたものの、気にもなっていないものの、怪訝に無視してきた……それ。

エルシアンの両手にすくいあげるほどの大きさの毛蟹。

「カーシャ……いや、蟹……」

エルシアンは呟き、そしてファイエを見上げ、蟹を見た。ファイエの方は当然であるというような、もっともらしい顔で頷いている。何の冗談なのだろうかと思わず失笑し駆けた瞬間、その声はした。

「エル様、お早うございます」

エルシアンは一瞬ぐくりと生唾を飲み、僅かに腰を浮かせて周囲を見回すが、誰もが挿して疑問を持たないような顔つきでいる。というよりも今この瞬間に挙動が怪しいのは自分だけだ——という事実には遠い眩暈を覚え、エルシアンはどさりと椅子に座った。

「ご気分でも悪いんですか……？」

普段聞き慣れたカーシャの声が、やはり耳馴染んだ優しさのままでエルシアンを気遣っている。ごく普通の朝、ごく普通の会話、ごく普通の夫婦。たった一つ普通でないことは。

エルシアンは混乱しそうな思考をとどめるようにこめかみを指で強く押しながら、毛蟹と真向かい合った。

「……カ、カーシャ？」

「はい？」

返事はやはり、蟹から聞こえた。

エルシアンはじっと毛蟹を見つめ、曖昧に笑った後でおもむろにテーブルクロスを持ち上げて中を見る。が、そこには椅子の足ばかりが並んでいて、他には何もない。

「公、あの……どうかなさいまして？」

ファイエが怪訝に眉根をよせる。エルシアンはいや、と首を振り、それからもう一度食卓の下を覗き、そして椅子に座り直した。事態は全く飲み込めていないのだが、目の前の毛蟹はカーシャらしい。らしい、というのはエルシアンがそれを認めたくないからだ。何がなんだか分からない。自分が全く事態を飲み込んでいないことだけが分かる。

エルシアンの呆然をよそに、いつもと同じような朝食が始まった。召使いたちの給仕ぶりもエルシアンの好みの問題であまり変わり映えしない献立も、何もかもが普通の朝だ。流されるまま朝食のパンをかじりながら、エルシアンはちらちらとカーシャというべきなのか蟹とするべきなのか、彼の眼前で食事をする毛蟹を見つめる。器用にハサミでパンを押さえてちぎって食べているのを半ばぼかんと眺めていると、眼球が不意にせわしく左右に揺れた。

「エル様、どうなさったんですか？ 今日は何だかちょっと変です」

言っている内容も声音も元の妻のままであったから、尚更エルシアンは微妙な面もちになり、うんと曖昧な返事をした。

「変かな……変……変だよな、多分。……それとも俺が間違ってるのか？」

エルシアンの不審とは裏腹に、その場にいる全員がカーシャも含め、彼女が毛蟹の姿をしていることに疑問を抱いていないようであった。その至極当然と言った顔つきを眺めていると、次第におかしいのは自分のほうのような気になってくるのは何故だろう。エルシアンは一つ大きく頭を振る。自分だけが見ている白昼夢だと思いたかった。あるいは、昨晚の夢の続きだろうか。そこまできて、エルシアンはやっと昨日の夕食の一件を思い出した。

（エル様は私と、蟹と、どっちがお好きなんですか！）

（——蟹！）

そうだ、確かにそんなことがあった。けれど、こんなものは言葉のあやだ。それを真に受けて……というよりも、論理的に、ありえない。人が蟹に変わるなどという奇病があると知っていたら大体ミシュアルになんか来なかった、なんで誰も教えてくれなかったんだ—— エルシアンはふっと素に返った。こんなことを真剣に考えている自分自身がひどく錯乱しているのだと思ったのだ。

「エル様、お熱でもあるんでしたら今日はお仕事お休みになって、部屋でゆっくりなさって下さいね」

先ほどよりやや心配そうな色味が濃くなってきた妻の声に、エルシアンは必死で笑顔になってみせた。

「いや、今日は大事な会議があるからね。それに体調は悪くないから大丈夫、ちゃんと行くよ」

尤もおかしいのは自分の目か頭かもしれないが。

半ば呆然としながら機械的に朝食を口に運んでいるエルシアンの前で、くだんの蟹は平然——という表現が蟹に適應されるなら——とパンをかじり茶を啜り、カボチャと薫製肉の炒めものからいつものように丁寧に肉を抜いている。その仕草を見たときに、この毛蟹と妻の像がぴたりとエルシアンの中で重なった。毛蟹が妻だというならそう……なのかもしれない。何故ならカーシャも同じものを出せば同じ事をするからだ。

「……カーシャ、ちゃんと肉も食べろよ」

普段のような小言を口にして、エルシアンは眩暈の小鳥のようなものがぐるぐると自分の周辺を飛んでいる気分になった。この奇妙で現実的な世界に自分まで違和感なく馴染んでしまったらどうしようという気持ちと、自分以外の誰もが奇異な感覚を持っていないことに対する薄い恐怖が交互に浮いてくる。カーシャであるらしい蟹はエルシアンの言葉に一瞬ぴくりと目をあげて、渋々言い訳のような小さな切れ端をかじり始めた。その態度もまさしく妻のものであった。エルシアンはもっと、と言いかけてそれを飲み込んだ。

——私と肉とどっちが好きなんですかなどと下らないことを聞かれたら、反射的に肉と怒鳴ってしまいそうだ。それ

が全体の呪文なのかどうかは知らないが、とにかくこれ以上の異常は勘弁されたい。自分の思考がいやに後ろ向きの上に全く論理的でないことを承知しているが、今エルシアンを取り巻く状況も全く論理的でないのだから、多少自分の思案に飛躍や突飛なものが混じっていても仕方がないだろう。

……と、無理矢理自分を納得させて、エルシアンは残りの朝食を押し込み席を立った。いずれにしろ、そろそろ公邸の方へ行って執務を開始しなくてはならない時間だ。

「いってらっしゃい、エル様」

いつものような妻の挨拶にエルシアンは頷き、まだ夢の続きを見ているような気持ちでいってきますと呟いた。

執務室の方には既にハイフォンがいた。彼は他の漢氏が頑なに着込んでいる漢氏服や結い上げる髪型にはさほど頓着しない。エルシアンたちと同じようにお仕着せの秘書の制服に合わせて髪もこちらの風俗様に適当にひつつめている。学生時代から馴染んでいる相手が全く普段と変わらない様子であったことで、エルシアンは多少落ち着きを取り戻した。あれは夢だ、と断じてしまうのにはためらいが残るものの、自分の適当な執務ぶりに小言をくれる彼の表情を見ているとやっと現実へ戻ってきたような気分になる。

エルシアンは知らず、微笑んでいたらしい。ハイフォンが怪訝な面もちで説教を途中で切り上げた。

「何だよ、今日は素直に聞くんだな……顔色良くないな、大丈夫か？」

「平気だよ、ちょっと出がけに……」

言いかけてエルシアンは言葉を一度飲み込んだ。自分でも処理できていないことを上手く彼に伝えられる気はしなかった。

「……出がけに夫婦喧嘩しただけだから」

本当に相談したいのはそれとは全く別の部分なのだが、なんと言っているのかもよく分からない。朝起きたら妻が蟹になってました？ ゆうべ君より蟹が好きだと言ったから？ 一体何の妄想なのだと自分なら笑い飛ばすだろう。

ハイフォンは肩をすくめた。余所の夫婦喧嘩などは猫もまたぐ、ということを彼はよく知っているのだった。

「ご家庭のことはご家庭で処理してくださいな。とにかく、領地の人民に慈悲と恩恵を施すべきお立場、ゆめお忘れ無く、ミシュアル公閣下」

わざわざ役名で呼ぶところは嫌味であろう。昨日既済書類の署名を彼に押しつけて、フィリルと共に新設した貿易交換取引所へ視察に行ったのを根に持っているのだ。

「今日は朝から会議だったっけな」

ハイフォンの苦い釘には気付かないふりで、エルシアンは毎度自分で書き留めている会議の記録を取り出す。書記官が残す正式な議事録もあるが、こちらのほうが自分で書くせいなのだろうがわかりやすかった。議事録をめくり、前回の流れと自分の発言などを簡単に頭に入れてエルシアンは会議室に向かう。ミシュアルの治領に関してエルシアンは、決して怠慢な領主ではない。ただ、署名だけの書類などに代表される事務と計算尺の無い状態での経済学の巨大な計算には尻込みしがちなだけなのだ。

——だが、この日の会議にはあまり身が入らない。一体どこからが夢なのか現実なのか、気付けば海産物取引品目の「蟹」だけに反応する始末だ。エルシアンの様子がおかしいと参議官にも伝わったらしく、途中で一度はさんだ休憩にハイフォンがそっと彼の耳に口を寄せた。

「……大丈夫か、お前、本当に？ 熱は……ないみたいだけど、少し気分が悪いなら会議は明後日に繰り越して、休んでもいいぞ」

今夜は領内の貴族の結婚式に主賓として招待を受けている。酒が入るのは必至であったし冬という季節のこと、彼が気遣ってくれたのは分かった——が。エルシアンはここでやっと重要なことを思い出した。あ、と声を上げて会議机に突っ伏し頭を抱える。

「そうだ、結婚式……」

この言葉にハイフォンも少し慌てたようだった。

「え、何だよ、衣装とか下賜品とか準備したよな？ いやそれ俺が手配したんだよな？ 祝辞も昨日書かせたよな？ え、え、他に何か段取り忘れてるっけ？」

「ああ、いや、それは大丈夫なんだけど」

エルシアンはハイフォンの動転には首を振り、そしてもう一度頭を抱えた。そうするしかない。

主賓としての招待は妻同伴なのだ。

「参ったなあ……カーシャどうしよう……」

よりによって蟹。

この季節毛蟹はどこでも食卓の豪勢な献立の一つに必ず上る。席について目の前に毛蟹が出てきたら、俺は一体どうしたらいいんだろう……いや待て、大体彼女を連れて行くのだろうか。今日は体調が不良ということでカーシャは連れて行かないほうがいいかも知れない。大体、材料だと思われてどこかへ連れ去られてしまう危険がないわけではな……

エルシアンはふと自分の思考に気付いて苦い顔になった。一体何を真剣に考えているのだろう、自分は。だが彼の言葉にハイフォンの方は余裕を取り戻したようだった。何だ、という声には明るい安堵が浮かんでいる。

「昼食は今日も私邸だろう？ その時に謝り倒してどうにかしたらいいさ」

エルシアンは曖昧に頷き、そしてハイフォンをじっと見た。自分一人では解決できない気もするし、彼に事実を見せて相談したい気もする。

そもそも言葉で何かを説明するよりも、現実をありのままに提示しなくては信じてもらうところから、の話だ。

「……なあ、昼飯、お前も一緒に来てくれよ」

エルシアンの言葉にハイフォンは一瞬苦笑したが、エルシアンが存外に真剣なのを知ったのだろう頷いた。

「その代わり、仕事はちゃんとするんだからな」

念を押されてエルシアンは何度も頷いた。仕事くらいで妻のことがどうにかなるならすがりたい。本当に、一人ではどうしていいのかさえ見当がつかないのだ。エルシアンの顔がぱっと明るくなったのを見て、ハイフォンは苦笑した。夫婦喧嘩なんか見ると結婚なんかまだまだなくていいなって思うなあと言われてエルシアンは肩をすくめる。ハイフォンは漢氏という世界の王子の一人だ。彼なりの優雅さで独身を楽しんでいるのだろう。

「いやいや、家庭ってのも悪くないよ。まあオコサマには分からないだろうけど」

「俺はせっぱ詰まって慌てて結婚しなくてもいいからな」

二人は視線を合わせて微笑み合う。学生時代からの気安い馴染みが気楽で良かった。

会議が終わると丁度昼食の時間になる。先に私邸の方へ従僕をやってハイフォンの分も用意するように伝えたから、忙しくてもそれなりにしているだろう。願わくば朝のアレが自分の夢であって欲しいのだが、これは期待というものであった。

ミシュアル領主としての執務の場である公邸と彼の生活の場である私邸は長い回廊と広い庭を挟んで隣接している。私邸の敷地に足を入れる時以外にはあまり護衛や警備などの重々しいことをしないエルシアンののどかさにハイフォンは時折忠告をくれるが、さして必要であるとは思えなかった。それに、友人に相談を持ちかけながら歩くときには便利といえる。

「……ま、そんなわけで怒鳴ってしまっさ」

事の顛末を語ると、ハイフォンはそう、と存外に優しい目をした。

「奥様は相変わらず、偏食で小食だね」

ハイフォンの素直な感想に、エルシアンは曖昧に笑った。カーシャの食事に関することは結婚して赴任地であるミシュアルで初めて一緒に暮らし始めた頃から気にかかっていた。それが悩みの一つになったのは、娘の出産のときのことが大きい。体格や体力の問題が折り重なって、妻は子供を産むことが非常に辛い身体なのだと気付かされたのだ。あの時の重苦しい恐怖は二度と見たくなかった。エルシアンの穏やかな表情で、ハイフォンも何事かを思っただけ。心配だね、と付け足してそっと笑った。エルシアンはそれに頷くように微笑んで、ぬるい溜息になった。

私邸の方はそれなりに準備をしていたようであった。そう長い距離を歩くわけではないが妻の気遣いでいつも玄関に用意されている蒸した布がきちんと二人分揃えられている。奥様はそんなに怒ってないみたいだよと言うハイフォンにエルシアンは返答をせず、いいからと彼の袖を引くようにして朝と同じ食堂へ入っていった。

頼むから朝のアレが自分の幻覚であって欲しいというエルシアンの希求はやはり叶えられない。彼と向き合うようにして作られている席にはやはり、というべきなのか当然のような風情で毛蟹がたたずんでいる。

「ハイフォン、久しぶりです」

カーシャの声が普段と変わらない、おっとりした口調で言う。

「あ、ええ、お久しぶりです、奥様。……お体の方はもうよろしいんですか？」

一瞬返答が遅れたものの、ハイフォンはごく普通に会話を交わしている。やはりおかしいのは自分だけなのかとエルシアンはいぶかりながら、自分の席に腰を下ろした。

昼食は非常に和やかに、穏やかに過ぎていった。相変わらずカーシャ（であるところの蟹）は苛立つほどものを食べない。それをハイフォンからもやんわり叱って貰うことが出来たのは拾いものであったかも知れないが、しかし、それにしても。ハイフォンはしごく穏やかに当然のようにカーシャと話している。妻の方もあまり普段と変わらない。

何か、蟹であることを気にしているのは自分だけのような焦りがエルシアンの中にぐるぐる渦巻いているが、表面だけは綺麗に二人に合わせてしまう辺りエルシアンの習性と言うべきであった。昼食が終わってカーシャが私邸の玄関まで見送りに出してくれる。普段は嬉しいはずなのだが、ハサミをかたかた振られてそれに手を振り返している自分について、ひどく奇妙で微妙な感触を持つのは自分の心が狭いのだろうか。

エルシアンはふっと溜息になって、公邸へ歩き始めた。ハイフォンの足音がそれに続いた。

私邸から公邸に戻る道すがらには、回廊が造られている。ミシュアルは温暖で雪は滅多に見ない土地であるが、霜は降るために冬はぬかるみが出来やすい。そのためにも、この回廊は便利であった。公邸の通用門が視界にもどってきて、エルシアンはちらりと背後の友人を見やる。私邸を出た頃から彼は殆ど口をきかない。黙って視線を下に流したまま、じっと何かを考えているような表情であった。

「ハイフォン」

エルシアンが呼ぶと、それではっとしたように漢氏の友人は顔を上げた。僅かな瞬間、めまぐるしくお互いの思惑の光が瞳を往復する。

「あのさあ……」

友人の唇が重たげに、しかし言わねばならないという決然とした調子で開く—— が、その先の切り出しが出てこない。彼が何を迷っているのかをエルシアンは目線の交感で既に知り得ていたような気持ちになっていたから、ハイフォンから目を逸らさずになあ、と呟いた。

「……蟹……」

その言葉にハイフォンがずっと視線をきつくした。自分の呟きが彼の中に完全に落ち着くまでエルシアンはじっと時間を待つ。あるいはそれは、長い一瞬であった。

「そう、蟹、蟹だよ……な？」

ハイフォンはひどく安堵したような顔で吐き出すように言い、どっと疲れたように溜息を長々と吐いた。エルシアンは何度も無言で頷いた。自分の見たものが信じられないと言うようにハイフォンは今度はひたすら首を傾げては振り、傾げては振り、壊れた人形のような仕草を繰り返している。それに無限に頷き続ける自分が加わって、へたくそな芝居のようだ。

「そうなんだよ、蟹なんだよ、朝からあんななんだよ」

やっと訴えることの出来る相手を見つけた安堵と依存で、自分の声は普段よりも甘たるい。だが、朝起きたら妻が蟹になっていたという異様な事態を他人が認知したことで、ようやく自分がおかしいわけではないのだという確信を得、エルシアンはほっとしているのだった。ハイフォンはまだ首をひねり続けている。

「おかしいとは思っただけだよ、お前もファイエも他の召使いも普通にしてるだろ？ 奥様が蟹に見えるのは俺だけかと思った」

ハイフォンも彼と同じ事を思ったようであった。エルシアンは苦笑する。どうしよう、と呟くとハイフォンは大きく首を振った。

「知らない。分からない。大体、こんなことってあるのか……いやあるんだよな、そうなんだけど……何で蟹になったか心当たりはないのか？」

これも通常であれば実に微妙な質問であつたろうが、ハイフォンの混乱もエルシアンにはよく分かる。いや、と生真面目に返答すると、だろうねと友人は溜息になった。

「今夜の招待はどうするんだ奥様は急病でご欠席、にするのか？ 本人はいくつもりでいるみたいじゃないか、どうすんだよ」

先ほどの昼食の席でハイフォンが今夜の結婚式の衣装の話をしていたのはそのせいだったのだとエルシアンは思い至る。カーシャは確か、エルシアンの分家についてきた天国鳥の紋章を裾に刺繍したドレスを新調したのだ。びろうどのなめらかな光沢がやっと18になる妻の若い可愛らしさを適度に大人びさせていて、仮縫いの時からエルシアンに見せに来るほど彼女は楽しみにしていたのだが……あれを着るつもりでいるのだろうか。但し、どうすんだよと誰かに詰め寄りたいのは自分であった。

「ど、どうしたらいいと思う？」

エルシアンが聞き返すとハイフォンはじっと考えこんでいたが、やがてうなりながらも口を開いた。

「奥様はご欠席にするか……しかしアマトア公はシエルナとは遠縁だから奥様からも花と祝辞をいただいてるんだし、欠席はまずいよな。いっそ誰か代役でも立てて適当に誤魔化したらどうだ——ファイエでもいいと思うが」

エルシアンはそれには首を振る。何故と聞かれて微かに笑い、ファイエは駄目だと強く言った。

「彼女は駄目だ。他に心当たりがあれば探したい」

何故、とハイフォンが聞き返す。それに返答せず、エルシアンはもう一度彼女は駄目だと繰り返した。北風が二人の間を早足で駆け抜けていく。一瞬頬に散った後れ毛を耳にかけ直して、ハイフォンは哀しげな顔で目を伏せた。

「……気付いてたのか、お前……」

エルシアンは唇で笑って直接の返答はしない。ただ、彼女はカーシャの友人だ、と低く言った。

「彼女が妻の友人であるなら、俺は知らないほうがいいこともある。結局、俺にとって一番大事なのはカーシャだから——……」

ふと胸内に淡い金の髪が揺れた気がして、エルシアンはそこから無理矢理目をそらした。今はもう、関係のないひとのことを思い返す自分がひどく薄情で不埒な男に思えてくる。そのあえかな光感を見せず、エルシアンは友人に向けて苦笑を作ってみせた。

「だから今の話もなかったことにして忘れて欲しい。俺は何も知らないし、見ていないし、気付いていないんだ」

エルシアンは他人の好意と悪意に人一番敏感なたちであった。ファイエの穏やかな微笑みの向こうに隠された何かがあることは何かの劇的な出来事さえなくても、文字通り肌で感じる事が出来た。けれど、それはカーシャの身辺からゆるやかで穏やかな時間を奪うだろう。どちらを大切にしたいのかと問えば、まるで考える時間もないほど素早く妻であると結論が出た。ああ、とハイフォンはそれで小さく頷いた。

「だから女を呼んだんだな、彼女に手をつけるんじゃない」

エルシアンは肩をすくめることで肯定する。実際ファイエと関係を持つ方が楽なのは承知しているが、カーシャのことを大切に思うならば、最初からその選択はなかったのだ。いいさ、とエルシアンはハイフォンの袖を引いた。あまり立ち止まって話しては冬の風の厳しさが身体の芯まで入り込んでくるようであった。

公邸にはいると一息に暖くなる。ふわっと頬が紅潮していくような感覚にエルシアンは少し笑い、お茶にしようと言って執務室へ戻った。ハイフォンは自他共に認める無類の茶道楽で、彼にして貰うと茶葉が一段高級になったように味が上向く。決済の書類に適当に署名を入れながら、エルシアンはで、と言った。

「結婚式、どうしたらいいと思う？」

うーん、とハイフォンが唸る。シエルナとは遠縁と彼が先ほど表現した関わりで、カーシャの名前で既に花や祝辞などを送ってある。彼女が公式かそれに準じる場所へ出るのは非常に珍しい部類に入るため、楽しみにしていると先方から言われたこともあり、欠席として簡単に処理してしまうには気が引けた。……何よりも、本人は行く気だ。

「大体何で蟹なんだ、もっと違うものでも良かっただろう」

ハイフォンの主張も非現実的な現実には惑わされておかしくなっているが、エルシアンはそれを指摘せずに頷いた。ほんとだよ、という溜息が自分の唇から自然と零れてくる。

「蟹じゃなきゃ何でもいって気持ちになるな、まったく……当て付けだとしても程があるよ」

「当て付け？」

ハイフォンの問いにエルシアンは大体の経緯をかいつまんで説明する。と、ハイフォンは長々とした溜息になった。

「じゃああれだ、お前が済みませんでしたって謝り倒せば済むんじゃないか。意地張るなよ、馬鹿馬鹿しい……大体こういうときはさ、愛の力とかでどうにか丸く収まるんじゃないのか、普通」

ハイフォンはふてくされたような顔をしている。エルシアンは彼の耳を軽く引っ張って渋面を作ってみせた。

「それがおとぎ話ならな……ハイフォン、投げやりに変なこと言うなよ、お前投げてるだろ、人ごとだと思って……」

既に建設的な話し合いにはなっていないのだが、前提条件からしておかしいのだから仕方がないとエルシアンは見切りをつける。だが、いいやとハイフォンは強く言った。

「違うな、こういう時は王子様の愛のキスで目覚めることになってんだ。これ以上は俺は独身のオコサマだから、夫婦間

の微妙なことは全ッ然、分かりません！」

彼は現実には嫌気が差したに違いなかった。エルシアンは待てよ、と友人の袖を掴んで彼の淹れた茶を褒めちぎるがあまり効果がない。それでもしつこく食い下がると、ハイフォンはだから、と面倒そうに言った。

「それはやっぱり奥様に謝り倒すしかないよ。蟹より好きだとか、蟹でも好きだとか、なんかそんなことでも言ってやれよ……そ、そうだお前だって去年まで現役の王子様だったんだから、資格はある！」

「……は？ いや、おとぎ話の王子様と俺が王子だったのは全くどんな関連もな……」

「いや、多分ある！ いや、あるったらある！ いいな、それで駄目だったら代役にするのか欠席にするのか……お、奥様を本当に連れて行くのか自分で考えろ！ 頼むから俺を変な世界に引き込まないでくれよ」

ハイフォンはそれだけ早口で言って彼の縫り付く手を振り払い、エルシアンの机にどっさりと書類の束を置いた。

「さ、仕事仕事。今日こそはギリギリ働いて貰うからな」

ハイフォンの目に『勘弁してくれ』という泣き言を見つけ、エルシアンは口元を歪めた。

——勘弁されたいのは、自分であった。

ここしばらくの怠慢な職務のつけを一息に払わされ、エルシアンは夕方近くなってから私邸に戻った。一縷の期待をもって覗いた妻の部屋にはやはり……蟹。

「……どうしたんですか、エル様？」

落ち着かない様子の彼に妻はいつもの通りの淡く、邪気のない声で話しかける——蟹の姿のまま。カーシャ、と呼ぶとこれも全く変わらない声音ではいと返る。いっそこれで声や仕草なども変わっているのなら現実を無視することは可能だろうに、何の嫌味なのか外見が蟹というだけで妻の本質は何一つ変わっていないのだった。……それだけ変容すれば十分なのかも知れないが。

エルシアンは努めて穏やかに妻を呼んだ。カーシャもええ、と淡く返事をする。昨晚のひっくり返ったかんしゃくの様相などは今は綺麗に消えて、日常のゆるやかさは少なくとも声音には戻ってきている——ゆえに混乱もするのだった。

。

「昨日は済まなかった」

ハイフォンの投げやりな言葉にどれだけの信憑性があるのかなど知らないが、謝れ謝り倒せという彼の言葉に頷かない理由など無かった。エルシアンの言葉に、カーシャである蟹は吐息のように声を漏らした。笑っているようであった。

。

「エル様、むきになるんですもの……私よりも蟹が好きだっておっしゃるから、びっくりしたんです」

「いやあれは言葉のあやというか、勢いというか……謝る、謝るから、頼むから、元に戻ってくれないか……」

一体自分が何を呟いているのだろうとエルシアンは理性の隅でこっそり呟くが、カーシャとの会話は何故かこれで辻褄が合うらしい。カーシャはそうですねえ、とくすくす笑っているのだ。ますます奇妙な気分になるが、ではハイフォンの言葉もあながち的はずれではなかったのだと思えば次に言うべきは決まっている。

「好きだから、頼むから、元の姿に戻ってくれ……なあ、次の子供も欲しいんだろ？ き、君が蟹のままだったら、子供だって無理じゃないか」

「潰されちゃいますものね」

微妙だけどそこじゃない。咄嗟にでかかった言葉を飲み込み、エルシアンは頷いた。今カーシャの機嫌を損ねたくはなかったのだ。カーシャは小さく含み笑い、エル様、と言った。

「私、エル様のお好きなものになりたいんです。ね、どうしたらいいですか？」

「元に戻ってください」

エルシアンは深く頭を下げる。元々王族としての誇りの薄いたちであったから、割合簡単に彼は頭を下げるのだった。

。

「でも、エル様、私よりも蟹がお好きだって」

「いや、それは謝るから、ごめんなさい。元に戻ってください」

「じゃあ……」

彼女に向かって頭を下げていると、急に声の焦点がぼやけて聞こえなくなった。エルシアンは顔を上げる。そこにいたはずの蟹の姿はなく、かといって代わりに元のままの素直で愛らしい、少女めいた姿は見つけられない。不安になって周囲を見回していると、エル様、という声が突然後ろからかかってエルシアンは咄嗟に振り返り、微かに後ずさった。そこにいた女はカーシャではなかったが、彼の知った女だった。もうずっと前に、初めてつき合った少女。

何を言っているのか分からずに呆然としたエルシアンの前で、少女はくすりと笑った。その声は確かにカーシャだった。君、と言いかけた時に少女の姿がふっと変わる。それもまた、以前気持ちを寄せていた少女だ。思い出が切り替わるように、次々と関係してきた女達が現れてくる。カーシャ、とエルシアンは呻いた。

「君が好きだ——だから、こんな風に俺をからかわないでくれ」

何故彼女が自分の記憶の中を知っているのかなど、考える余裕もなかった。

カーシャ、とエルシアンは首を振った。

「頼む、俺は君と結婚して良かったと思ってる、君が好きだ、君とリーズと、ふたりとも俺の一番近くで一番大切にしているつもりだ、だから君が心配だから、怒鳴って済まなかった、けど、君を大切に思うから、好きだから言うことだってある、君が好きだ！」

殆ど叫ぶようにした言葉の最後で、全く違う姿をした妻はふっと淋しく笑った。その顔は一体なんだと言おうとした唇から零れたのは、恐らく悲鳴にもならない吐息だった。

ふわりと波打ち、優しくひたよせてくるような白金の髪。誰とも比較にならないほどに美しい面差し。殆ど触れることさえ出来ないで、心通じているのを分かっているながら手放さざるを得なかった女。エルシアンは喉を鳴らし、また一步、後ろへ下がった。

「.....カーシャ」

絞り出したような声が、泣きそうに震えている。エル様、と呼ぶ声は妻そのもののあどけなさなのに、何故こんなことをするのだろうと息苦しさにあえぎ、エルシアンはカーシャともう一度怒鳴り、――

「きゃっ」

――怒鳴ったことで、跳ね起きた。

視界が暗い。それまで黄昏の淡い光の中にいたはずなのに、急に光を見失ってエルシアンは少しの時間呆然とする。目の端に、けれど暖かな色をした光が蛍のように紛れ込んできて、エルシアンはゆっくりそちらを見た。

「.....エル様、大丈夫ですか.....？」

蠟燭台を手に彼をのぞき込んでいるのは、彼の妻だった。金茶色の髪がふわふわと頬を縁取って流れ落ちている。心配そうな面もちで微かに目を見開くようにしてこちらを見つめる姿にエルシアンはやがて心底からこぼれてきた笑みになった。

「カーシャ.....」

妻はこくんと頷き、彼の側によると寝台脇の小卓に蠟燭台を置いた。エルシアンはもう一度妻を呼んだ。カーシャはい、と彼女らしい素直な返事をしてエルシアンの横に腰を落とした。その頬にそっと触れる。ぬくもりも肌のなめらかさも、まったく同じだ。戻ったのだという感慨がその頃になってやっと湧いてきて、エルシアンはカーシャを抱き寄せた。そっと彼女が自分の胸に頬をすり押し当てる。

軽く何度か唇をあわせていると、蠟燭の炎がじりっと音を立てた。それで今自分が寝室にいることにエルシアンはようやく思い至り――

そして部屋の暗さに今度こそ仰天して、慌ててカーテンの隙間から外を覗いた。月はやがて真中天に達しようとしている。やがて夜中というべき時刻だ。エルシアンは頭を抱えた。

「.....結婚式.....」

エルシアンは呻く。主賓だったのに。何故誰も来なかったのだろう。ハイフォンだって一緒に行くことになっていたはずが、どうしてこんな.....

エルシアンの呟きに、カーシャがどうしたんですか、と言った。

「どうしたも何も、結婚式、すっぽかしただろう.....」

さてどんな風にして今後を取り繕うかを算段しながらエルシアンは次第に自分が青ざめていくのがわかった。主賓であったはずなのだ。

と、カーシャが不思議そうな声を出した。

「結婚式、明日ですけど.....？」

「.....明日？　だ、だって君が蟹になって.....」

エルシアンが言いかけると、カーシャは一瞬奇妙な顔をして、それからくすくすと小さく笑い出した。

「やだ、エル様まだ夢の続きですか？　どんな夢を？　蟹がどうとかって言ってるの、聞こえましたけど」

しばらくの、沈黙。

エルシアンはじっと妻の顔を見つめる。まだ幼さの片鱗を残しながら、それでも淡い眼差しと暖かなほほえみで彼を包み癒してくれる、愛しい人を。その笑顔にやっと、エルシアンの全身に現実感が戻ってくる。薄い笑みをこぼしてエルシアンはカーシャを見つめた。彼の視線にはにかむようにカーシャは唇をほころばせ、あの、と彼の袖を引いた。「あの、蟹、とそれと……私のこと、好きだって……」

エルシアンは淡く笑う。そうだね、と頷いて彼女の頬に触れ、唇で触れる。カーシャがごめんなさい、と小さく言ったのが聞こえた。

「エル様が私のこと、心配してくださってるのは分かってるのに、ごめんなさい……蟹と海老は本当に昔から、絶対食べられなくて……でも他のものはちゃんと食べるようにしますから……」

エルシアンは頷いた。さっきは俺も言いすぎたなと呟くと、カーシャが甘えているのか遠慮なのか、緩く首を振ったのが分かった。それをゆっくり抱き留めていると、耳元でそれと、と妻が囁くのが聞こえた。

「さっきあんな風だったから言えなかったんですけど、あの、今日からまたここで眠ることになりました……そのう……産婆さんが、もう、その、いいって」

エルシアンは黙って彼女を抱く腕に力を入れる。カーシャの細い腕が自分の背中をまさぐるように抱き返すのを待って、乱暴にしないように気をつかいながら寝台の中へ引き込んだ。

好きだよと囁くと、彼の肩に顔を埋めるようにして妻がひとつ、頷いた。

ところで翌日の晚餐の主菜が毛蟹で、夫婦揃って全く別の理由で顔をしかめたことは、この際は蛇足である。

【蟹と奥様 了】

幻想恋詩人

聖天皇帝戦記 外伝集

<http://p.booklog.jp/book/55280>

著者：名嘉つぐみ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/birdcage123/profile>

サイト：<http://birdcage.main.jp/>

表紙・中表紙 ふるるか様

<http://www16.ocn.ne.jp/~riru/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/55280>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/55280>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ